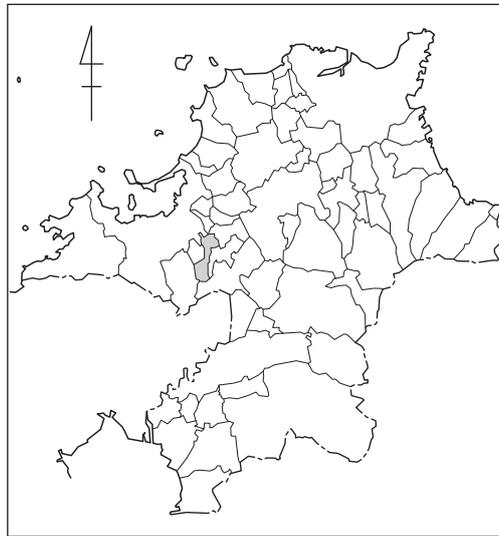


ほう まつ 宝 松 遺 跡 2

— 第 4 次 調 査 —

大野城市文化財調査報告書 第178集



序

福岡県大野城市は福岡平野の南部に位置し、その市名は日本最古の朝鮮式山城「大野城」に由来します。市域は中央部がくびれ、南北に細長い形をしていますが、北部に大野城跡、中央部に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡と、それぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財を擁する歴史豊かな街です。

宝松遺跡は、市域の北部、福岡市境に近接する場所に位置しており、これまで3次にわたる発掘調査を実施してきましたが、遺跡の北側に隣接する御笠の森遺跡とともに、中世から近世にかけての集落の跡ということが分かってきました。文献では17世紀後半ごろの山田村の移転記事があり、中・近世の村落の動向がたどれる希少な遺跡として注目されるところです。

本書は、宝松遺跡の範囲のほぼ中央に当たる場所で実施した、第4次調査の成果を記録した報告書です。平安時代末頃の屋敷を区画する溝や建物跡が見つかり、本遺跡の中心的な遺構の一部を確認できました。この時代の調査例は本市でも少なく、貴重な成果を上げることができました。

本書が皆様の文化財保護に対するご理解の一助になりますとともに、考古学の学術研究はもとより、地域の歴史の理解を深めることや、文化財の保護の啓発活動に活用いただくことを願ってやみません。

最後になりましたが、本調査にご理解ご協力いただいた土地所有者をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和2年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 吉富 修

例 言

1. 本書は、大野城市山田4丁目467-4番地で計画される店舗建設に伴う事前の発掘調査として実施した宝松遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は大野城市教育委員会が調査主体となり、工事主体者である筑紫農業協同組合・代表理事組合長白水清博氏の委託を受け実施した。
3. 本書に使用する実測図は遺構を澤田康夫が、遺物を小嶋のり子、吉田薫、古賀栄子が作成し、製図は吉田が行った。
4. 本書で使用する写真は、遺構写真を澤田が、遺物写真は図版写真を写測エンジニアリング㈱に委託し、牛嶋 茂が撮影したものを、挿図の写真は澤田が撮影したものを使用した。
5. 本書の遺構平面図中の方位は、座標北を表し、座標は国土座標系（第Ⅱ系）を使用している。
6. 文中、陶磁器の分類は特に記述しない限り太宰府陶磁器分類（「太宰府市の文化財 第49集」など。）に依った。
7. 本書の遺跡分布図は国土地理院発行の25000分の1地形図『福岡南部』を使用し、近隣の遺跡包蔵地分布図を参考に作成した。
8. 出土遺物に関して、陶磁器を大庭康時氏（福岡市教育委員会）、明治～昭和期の土人形については山村信榮氏（太宰府市教育委員会）に夫々貴重なご助言を頂いた。
9. 本書の執筆・編集は澤田が行った。
10. 本書掲載の遺物・写真は太宰府市教育委員会で保管している。

本文目次

I. はじめに	1
II. 立地と環境	3
III. 調査の内容	5
IV. まとめ	29

図版目次

図版 1	調査地全景・SB01・SD01
図版 2	SB01・SD01細部、SD01遺物出土状態、SD01土層
図版 3	出土遺物 1
図版 4	出土遺物 2
図版 5	出土遺物 3
図版 6	出土遺物 4

表目次

第 1 表	出土土器法量表	15
-------	---------------	----

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図 (1/2500)	2
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図	遺構配置図 (1/120)	5
第4図	SB01実測図 (1/60)	6
第5図	SK02・03実測図 (1/40)	7
第6図	各遺構出土遺物実測図	8
第7図	SD01土層図 (1/40)	9
第8図	SD01出土遺物実測図 1	12
第9図	SD01出土遺物実測図 2	13
第10図	SD01出土遺物実測図 3	14
第11図	SD01出土遺物実測図 4	17
第12図	SD01出土遺物実測図 5	18
第13図	SD01出土遺物実測図 6	19
第14図	SD01出土遺物実測図 7	23
第15図	SD01出土遺物実測図 8	24
第16図	SD01出土遺物実測図 9	25
第17図	その他の出土遺物実測図	27
第18図	SD01出土土器計測値散布図	29

I. はじめに

1. 調査に至る経過

宝松遺跡は市域の北部、大野城市山田4丁目を中心に広がる古墳時代から中・近世にかけての集落遺跡で、北に隣接する御笠の森遺跡と共に中・近世の山田村の動向を知ることができる大規模な集落跡として注目される遺跡である。遺跡の周知範囲内では、過去3回の発掘調査が実施されており、今回の調査は第4次の調査である。

調査地は山田4丁目467-4、469-2・10、482番地で、筑紫農業協同組合山田支店の店舗建設に伴い、事前の協議が申し入れられた。当該地は宅地で、倉庫や駐車場として利用されて、すでに旧地形は改変されていたが、試掘調査を実施したところ、しっかりした黄色粘土層の地山があり、ピットや溝などの遺構が確認されたので、この結果を受け、事業者と当該文化財の保護措置について協議を重ねた。

平成30年12月10日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出」によれば、用地の南西隅に鉄骨造り2階建ての建物が建築され、他は駐車場として利用される内容であった。試掘による遺構検出面は現表土から80cm下であり、建物部分の基礎工事が7.5m以上掘削するもので、遺構面に影響を及ぼす工事内容であった。平成30年12月26日付で福岡県教育委員会から「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で、発掘調査の実施の指示があり、それを受けて大野城市教育委員会とJA筑紫とで協議を進めた結果、今回の工事で建物が建ち、遺構が破壊される影響範囲約300㎡について発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

発掘調査は平成31年1月17日から調査区の設定等を行い、重機による表土剥ぎを始めた。重機による表土剥ぎは土の移動に手間取り時間がかかったが、2月14日に作業員を投入し、遺構検出及び遺構の掘削を開始した。調査区の東辺に検出した南北の大溝を優先して掘削を進めた。大溝は予想外に深く、集中して掘り進めた結果、2月26日にはほぼ掘削を終えた。また、調査区中央では大きな攪乱土坑が掘られており、焼失した家屋の廃材を埋めているらしく、瓦や灰、染付、ガラス瓶等が埋土中に認められた。3月8日ごろまで掘削したが、途中で断念し、西半のピット群の検出・掘削に移った。3月13日にはほぼ遺構掘削は終了し、14日の午後、高所作業車による全景撮影を行なった。同日、機材を片付け作業員の作業は終了した。その後、遺構の実測図を作成し、遺構の断ち割りなどして、3月26日に現場での全ての作業を終了した。

2. 調査の組織

発掘調査及び本書発行の整理作業にかかる調査体制は以下のとおりである。

教育長	吉富 修
教育部長	平田 哲也

ふるさと文化財課長	石木 秀啓
係長	佐藤 智郁、林 潤也、上田 龍児、徳本 洋一（30年度）
主査	徳本 洋一
主任技師	上田 龍児（30年度）
技師	山元 瞭平
主事	柴田 剛（30年度）、坂井 貴志（30年度）
嘱託	澤田 康夫、三浦 萌（30年度）、木原 堯
（庶務）	西村 友美、永松 綾子、呉羽 京子（30年度）、
整理作業員	村山 律子、白井 典子、仲村 美幸、小嶋のり子、松本友里江 津田 りえ、吉田 薫、氷室 優、古賀 栄子



第1図 遺跡位置図 (1/2500)

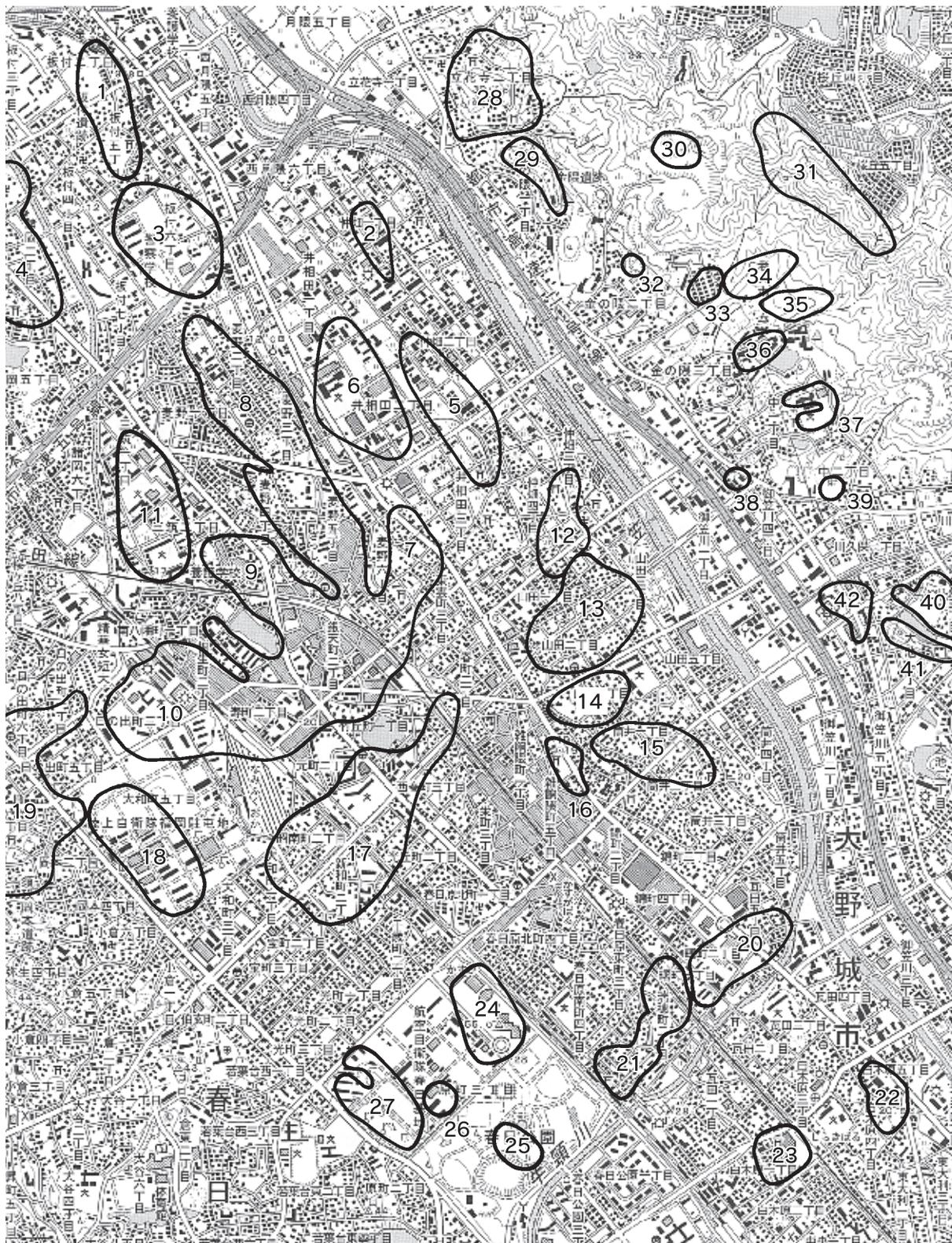
II. 立地と環境

1. 遺跡の立地

大野城市の市域は南北に細長く、中央部がくびれる鼓形をしており、北部には三郡山地に連なる四王寺山山塊とそこから南西に派生する低丘陵群、南西部には脊振山系の一角をなす牛頸山山塊とそこから派生する低丘陵群がある。この牛頸山から派生する低丘陵群は牛頸川及びその支流である平野川、御笠川の支流の平田川などの小河川により開析が進み、八つ手状の複雑な地形をなしている。地盤は早良型花崗岩で、表層はその風化土である真砂土が覆う。両者に挟まれる中央部は宝満山西麓に源を発する御笠川による沖積地及び氾濫原の低地をなしているが、所々に堆積を生じ微高地を形成する。この微高地に弥生時代以来の遺跡が営まれる。宝松遺跡は御笠川と牛頸川が合流する地点の北方、左岸側に広がる広範な微高地上の南西部分に立地する。

2. 歴史的環境

大野城市市域の遺跡を振り返ってみると、旧石器・縄文時代の遺跡は少なく、北部の乙金山山麓の釜蓋原遺跡では細石刃や縄文早期の押型文土器や石鏃が出土している他、松葉園遺跡、雉子ヶ尾遺跡、薬師の森遺跡など、散発的に認められる程度である。弥生時代になると、市域でも遺跡の数は増加するが、遺跡は市域の北部に多く、御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡、塚口遺跡で甕棺墓等が営まれる。集落では、仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡などがある。市域南部では遺跡の出現度は低い。古墳時代では、首長墓級の前方後円墳は認められないが、月隈丘陵にある御陵古墳群からは三角縁神獣鏡の出土が伝えられ、古墳時代初期の有力者の存在を窺わせる。中期では30m級の円墳である笹原古墳があり、帆立貝式の成屋形古墳（太宰府市）とともに御笠川流域の盟主的な勢力の存在を示す。後期では、乙金山、大城山の西山麓に群集墳が営まれる。持田ヶ浦古墳群、善一田古墳群、王城山古墳群などがある。古墳時代の集落遺跡としては仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡等が弥生時代から継続して営まれる他、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡等が新たに出現する。古墳時代中期になると遺跡は減少し、石勺遺跡、村下遺跡に住居址が認められるが、その様相は判然としない。後期になると、仲島遺跡、塚原遺跡群、日ノ浦遺跡群、上園遺跡、薬師の森遺跡などで集落が展開する。南部の牛頸山山麓には6世紀中頃を始まりとする牛頸須恵器窯跡群が隆盛に向かい、一大窯跡群を形成する。牛頸塚原遺跡群、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡、惣利西遺跡（春日市）などは、この牛頸窯跡群を造営した須恵器工人に関わる集落とされる。古代では大野城、水城が築造され、大宰府防衛の要となる。中世になると律令制は緩み、大宰府の凋落に伴い遺跡数は減少する。大宰府に代って「博多」が中世都市として成立し、市域はその周辺部として集落が発達する。森園遺跡、松葉園遺跡、薬師の森遺跡等で輸入陶磁器を副葬した土壙墓が見ついている他、集落では薬師の森遺跡、御笠の森遺跡、上園遺跡がある。近世になると、御笠の森遺跡で、方形区画を有する屋敷地が見つかり、有力農民層の集落と考えられる。これらの遺跡の多くは現在の集落と重複しており、この頃から現在に連なる景観が形成された。



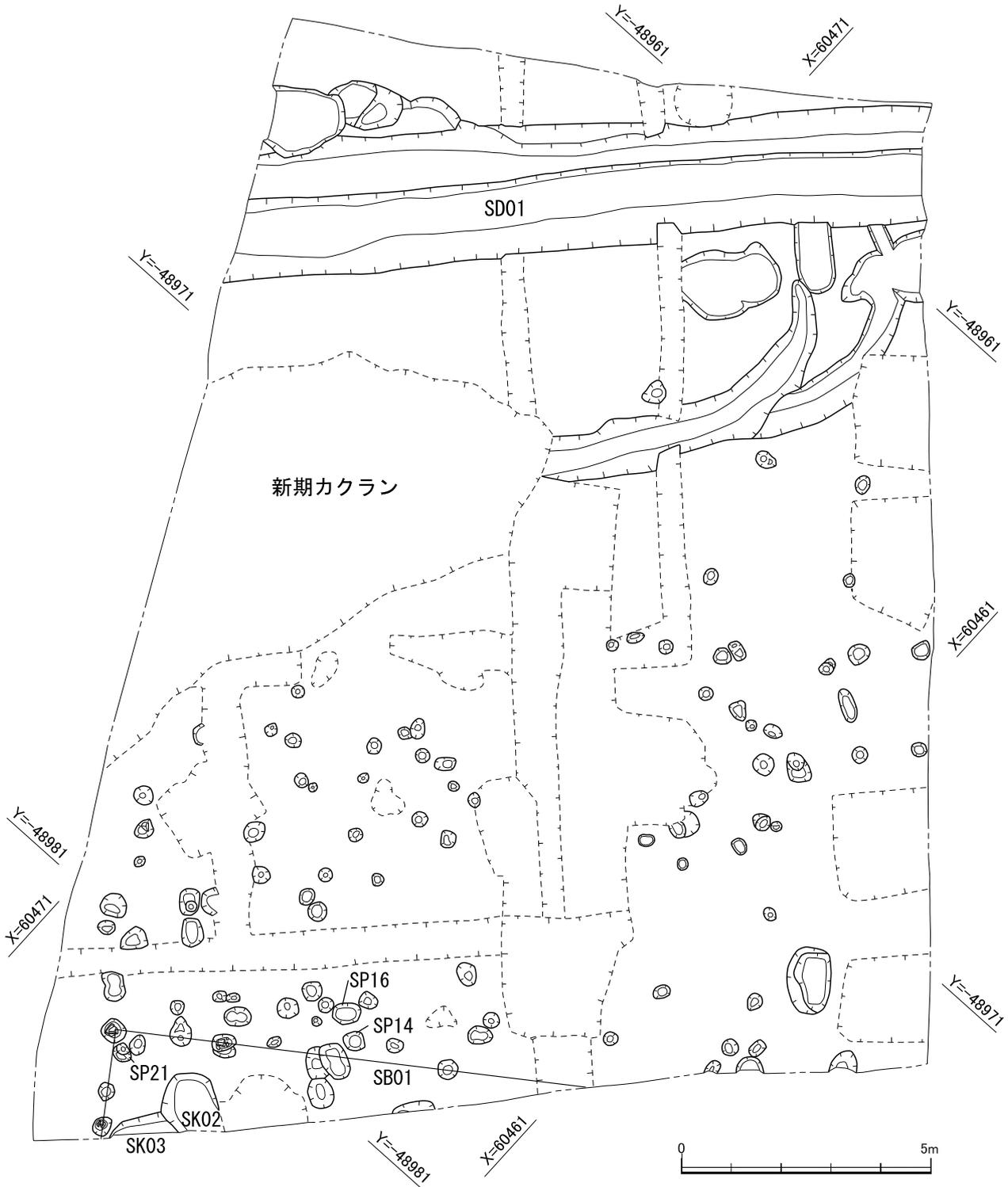
1. 板付遺跡 2. 仲島本間尺遺跡 3. 高畑遺跡 4. 諸岡遺跡 5. 仲島遺跡 6. 井相田C遺跡 7. 麦野B遺跡
8. 麦野A遺跡 9. 麦野C遺跡 10. 南八幡遺跡 11. 三筑遺跡 12. 川原遺跡 13. 御笠の森遺跡 14. 宝松遺跡
15. 村下遺跡 16. 雑餉隈遺跡 (大野城市) 17. 雑餉隈遺跡 (福岡市) 18. 川久保B遺跡 19. 須玖遺跡群 20. 石勺遺跡
21. 瑞穂遺跡 22. 原ノ畑遺跡 23. 後原遺跡 24. 駿河遺跡 25. 春日公園内遺跡 26. 先ノ原遺跡 27. 立石遺跡
28. 立花寺遺跡 29. 金隈遺跡 30. 観音ヶ浦古墳群 31. 持田ヶ浦古墳群A群 32. 影ヶ浦古墳群 33. 堤ヶ浦古墳群
34. 持田ヶ浦古墳群B群 35. 持田ヶ浦古墳群C群 36. 持田ヶ浦古墳群D群 37. 御陵古墳群 38. 塚口遺跡
39. 御陵前ノ椽遺跡 40. 森園遺跡 41. 中・寺尾遺跡 42. ヒケシマ遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ. 調査の内容

1. 調査の概要

調査地は、古くから宅地化が進み、土地の平滑化が進められてきた。従って、現在では地形の旧



第3図 遺構配置図 (1/120)

状を窺うべくもないが、現状の地形図で標高を拾うと、御笠川と並行して等高線が引け、所々で等高線が舌状を成し、川に沿って標高16～18mの河岸段丘様の地形を呈する。これらの緩斜面上に本遺跡や隣接する御笠の森遺跡、村下遺跡、雑餉隈遺跡等が立地している。

調査地は、倉庫などが建ち、周辺は駐車場として利用されていて、建物の基礎が遺構面を掘削していた。また、調査区の中央では、廃材を焼却した大きい攪乱土坑が掘り込まれ、炭、灰、瓦礫、ガラス、ビニール等に交じって、染付を主とした陶磁器類等が放り込まれていた。深い土坑で、調査期間や費用の観点から途中で掘削を中止した。遺構検出面は黄色粘土層を主に、黄色荒砂からなり、遺構の見極めは比較的容易であった。遺構は調査区の西半に集中してピットを多数検出し、グリ石を礎盤とした掘立建物を確認した。また、調査区の東辺では南北に走る大溝を検出した。また、建物周辺では、性格不明の土坑を検出した。

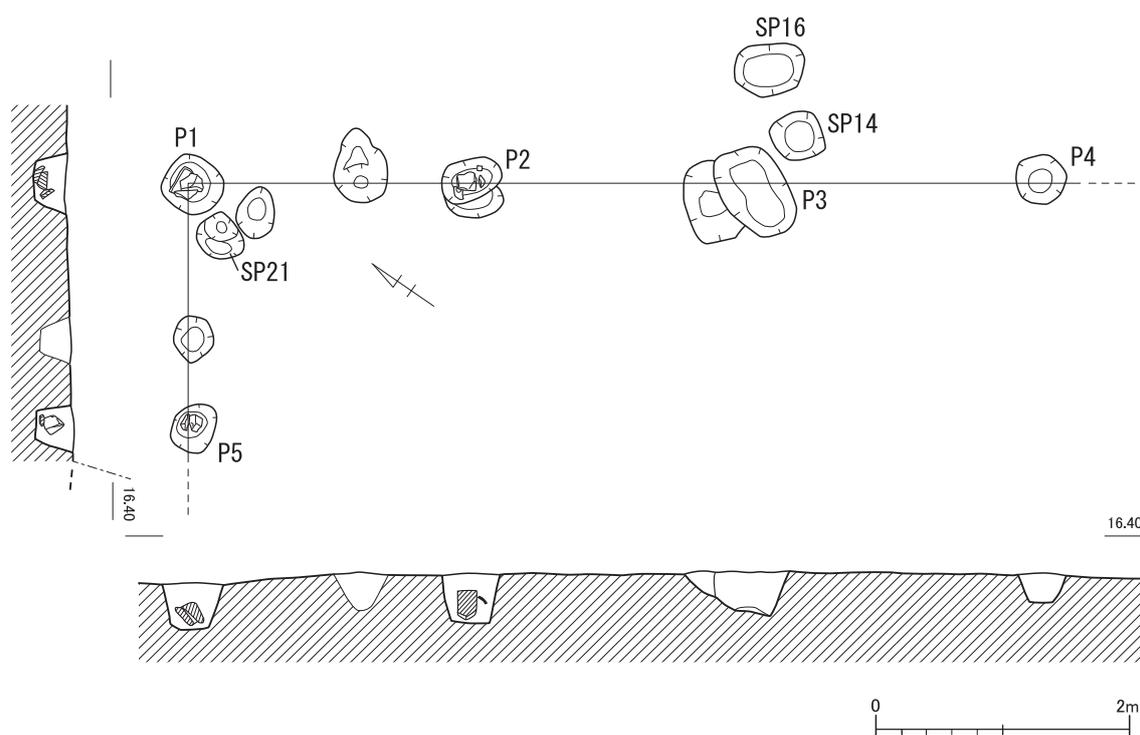
2. 検出遺構

今回の調査では調査面積の狭さや攪乱があった割には、比較的まとまった遺構が検出できた。検出遺構は、掘立建物跡1棟、土坑6基、ピット多数、大溝1条である。以下主な遺構について述べる。

(1) 掘立建物跡

SB01（図版1・2、第4図）

調査区の西半で多くのピットを検出したが、グリ石を礎盤とした柱穴が複数見付き、それぞれを結ぶ建物として確認できた。他にも同時期の土器細片を出すピットが検出できているが、建物として把握できなかった。SB01は、桁行3間分、梁行き1間分の建物の一部で、略北西に棟を向け、後述するSD01の方向とほぼ一致する。桁行きの柱間は2.2mを測り、梁行きの柱間は1.9mを測る。



第4図 SB01実測図 (1/60)

桁行は次の柱穴が想定されるところに現代の攪乱があり、梁行きは調査区外に延びているが、桁行4間以上、梁行き2間以上の規模の建物が推定できる。

出土遺物（第6図）

出土遺物は須恵器、土師器、瓦器、白磁があるが、P1、P2（第4図）からの出土が多い。

1は土師器坏で、直線的に外方へ開く口縁部である。口縁部外面は刷毛状の痕跡が廻る。内底部は棒状の工具で研磨様の痕跡を残す。外底は糸切りで、板状圧痕を残す。2は瓦器碗で、口縁部の器壁は均一で、中位の段は目立たない。口縁端部は丸く仕上げる。内面のミガキは分割して行われ、見込みまでジグザグに入れられるが、雑である。外面は口縁部付近をヨコナデする他、雑に撫で、ミガキの痕跡はない。中位付近の指頭痕は撫でられて不明瞭である。糸切りの底部には断面方形の低い高台が貼り付けられ、貼り付けた部分はヨコナデする。高台畳付に簾状の圧痕が残し、底部には細い線で十字が入れられる。内面は銀化が進むが、外面上半は黒灰色、下半は灰白色を呈している。3は白磁の口縁部で、端部は断面三角形にし、頂部は鋭い稜を成す。緑灰色の釉を厚めにかけるが、外面下半は施釉しない。近接するSP21から出土したものと同一か。4は白磁の碗の口縁片で、端部を折り曲げて玉縁にする。淡茶黄色の釉がかけられるが細かな貫入が入る。碗IV類。

(2) 土坑

SK02（図版1、第5図）

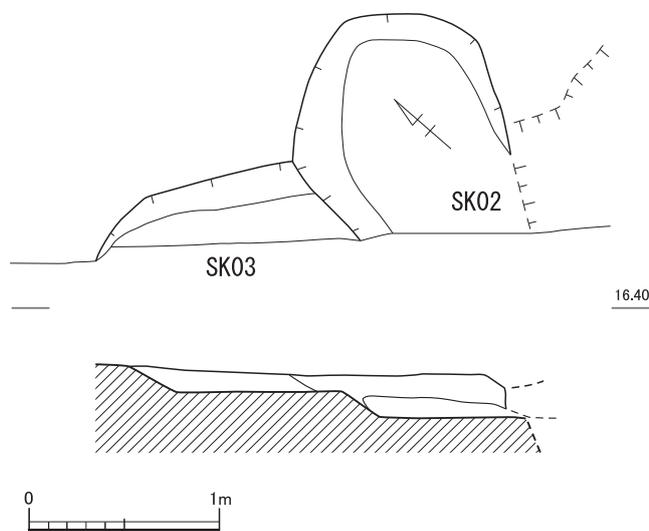
調査区の南西隅に検出したもので、西に隣接するSK03と切り合っている。遺構は調査区外へ延び、南東部は新期攪乱が入るので全様は分からないが、短辺が1m程の長方形プランを呈すると思われる。深さ20cm弱を検出した。

出土遺物（第6図）

5は土師器小皿。内湾気味に立ち上がる口縁部で、内外ともヨコナデされる。内底中央付近にナデが認められる。外底は糸切りで、板状圧痕を残す。6～8は杯。6は中位で屈曲する口縁部で、端部を小さく外反させる。内外ともヨコナデされ、内底部は撫でられる。外底部は糸切りされ、口縁部との境は明確である。板状圧痕が残る。7は法量が違うが6とよく似た特徴である。8は底部から直線的に大きく広がる口縁部を持つ。内底は中心に向かって渦巻き状に回転ナデが施され、不定方向のナデは認められない。外底は糸切りで、板状圧痕は認められない。

SK03（図版1、第5図）

SK02の西に検出した。切り合いは調査壁の土層を確認したところでは本遺構の方が後出である。埋土は似かよっており、出



第5図 SK02・03実測図（1/40）

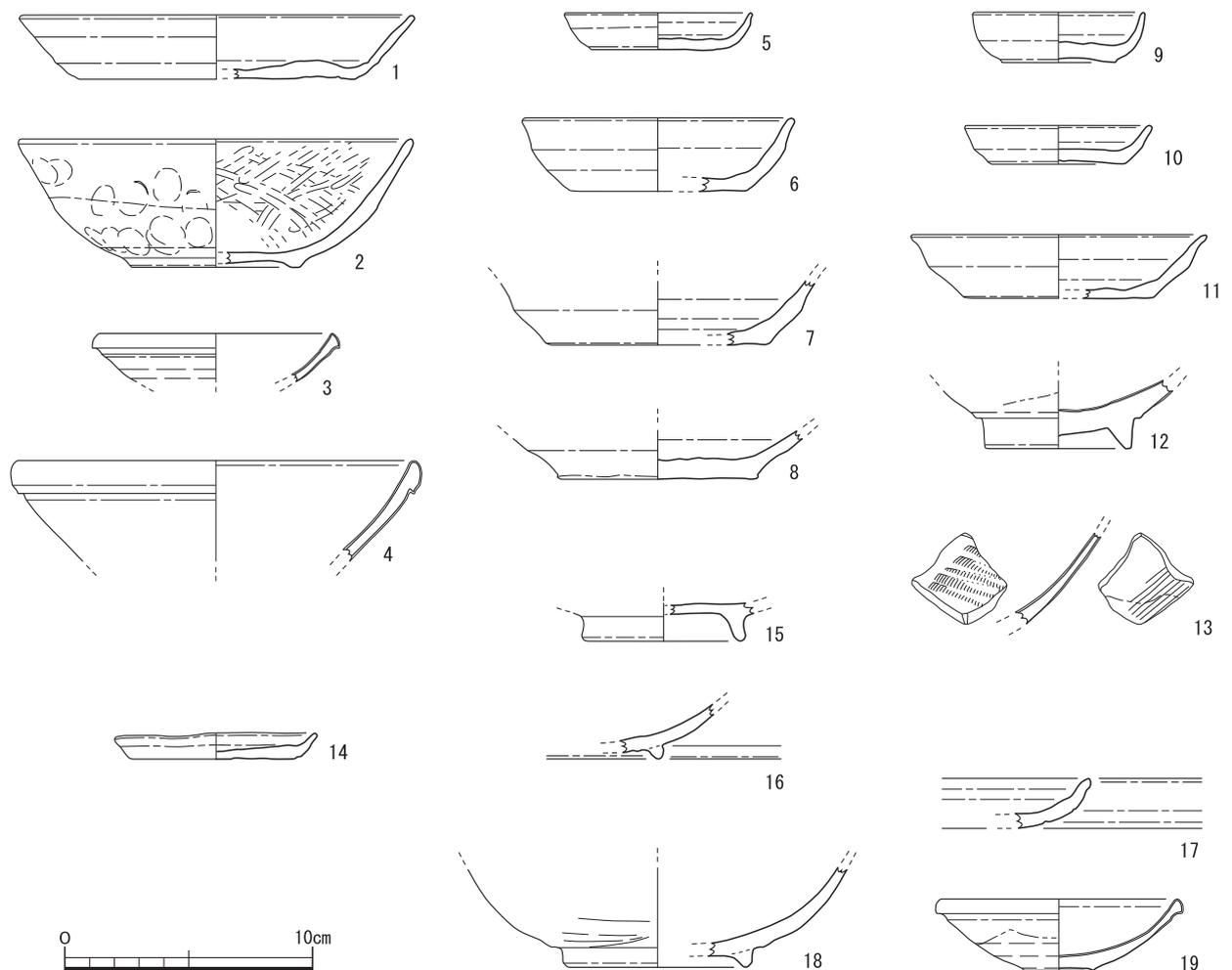
土遺物の年代観も大差ないもので、両土坑とも近い時期に掘られたものと思われる。大半が調査区外へ延びており、全様は不明である。深さ10cm程を検出した。

出土遺物（第6図）

9・10は土師器の小皿。9は内湾して直立気味の口縁部を持つ。底部は糸切りで、板状圧痕は無い。10は内底に不定方向のナデを施し、外面は糸切りで、板状圧痕が残る。11は杯で、口縁部の中位を屈曲させるのは6・7と同様な特徴である。外底部は糸切りで、板状圧痕が残る。12は白磁碗IV類の高台片である。緑味の白色透明釉がかけられるが、外面下半から高台には施釉されない。13は同安窯系青磁碗I類の体部小片である。外面に細かい縦方向の櫛目文、内面に櫛刺突雷文が施される。薄い緑色の透明釉がかけられるが、外面体部下半には施釉されない。

ピット群（図版1、第3・4図）

本調査では調査区の東半に殆どピットを検出しなかったのに比べ、西半では多くのピットを検出した。ここでは遺物を提示したピットについて述べる。SP14はSB01のP3の南に隣接するピット。直径40cm、深さ30cmの円形プランを呈する。図示した他に瓦器碗片が出土している。SP16はSP14の東隣に検出した楕円形プランのピットである。60×40cmを測り、深さ20cm程である。



第6図 各遺構出土遺物実測図

図示した他、土師器杯・小皿が出土している。SP21はSB01のP1に隣接するピット。径40cm程の2段に掘り込まれたピットである。深さ30cmを検出した。出土遺物のうち19はSB01出土の3と同一の可能性はある。

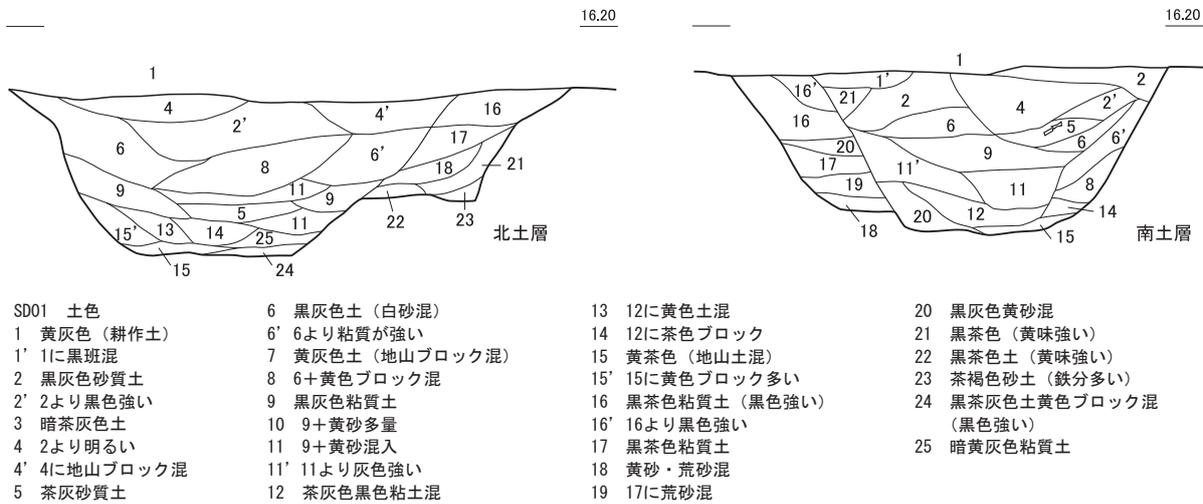
出土遺物（第6図）

14はSP14出土の土師器小皿である。短く立ち上がる口縁部で浅い。底部内面にナデ、外面は糸切りで、板状圧痕が残る。15・16はSP16からの出土。15は土師器碗の高台部を残すのみである。内底部に強いナデを施す。16は瓦器碗の高台部分。断面が四角形に近い小さな高台が付けられる。高台及び貼り付けた箇所はヨコナデされ、内面は雑なミガキが入る。外面のミガキは確認できない。17～19はSP21からの出土である。17は瓦器杯の口縁部片である。糸切りの丸みを持つ底部で、土師器の丸底杯の形態に近い。器壁が荒れて調整は不明確である。18は瓦器碗。小さく丸い高台が添付され、外面に雑な研磨が認められる。色調、焼成からは土師器と見紛う瓦器の焼成不良品である。19は白磁の皿。破片資料だが、底部から口縁部まで全様が知れる。口縁端部は玉縁状となり、緩く内湾する体部は平底の底部に至る。緑味のある白色釉をかけるが、外面体部中位までしか施釉されない。3と酷似する。

(3) 溝跡

SD01（図版1・2、第3・7図）

調査区の東辺で検出した。南東方向から北西方向へ向かう、ほぼ直線的に延びる溝で、断面逆台形を呈する。長さ13.7m、深さは約80cmを検出した。遺構上面で計測すると、溝幅は2.3mであるが、調査区の南壁と北壁の土層を観察すると、明らかに2本の溝が切り合っており、中央に残した土層観察でも認められるので、旧溝が埋まった後、同じ場所に掘り直したと考えられる。土層を観察すると、新溝の埋土は黒灰色粘質系の土が埋まり、溝底では地山由来の黄色粘土系のブロックを含む土が堆積していた。一方、旧溝は埋土が茶黒色系の土で、溝底には黄色細砂の堆積が認められ、水の流れたことが窺える。検出面の数値で、南壁では新溝は幅1.9m、深さ82cm、旧溝は深さ72cm、北壁では新溝が幅2.2m、深さ90cm、旧溝の深さ50cmをそれぞれ測る。新溝は、調査区内では約0.6



第7図 SD01土層図（1/40）

%の傾斜で北西方向が下がるが、ほぼ水平に近い。北壁周辺では溝肩に土坑状の掘り込みを検出したが、埋土の状態や土坑底から出土した小皿は溝と同時期のもので、洪水等で攪拌を受けた痕跡と考えた。

出土遺物

SD01の埋土は平面では殆ど黒一色で、2条の溝が切り合っているのは上層では掴めなかった。埋土の上層から瓦器や土師器、陶磁器が出土し始めたため、南半、北半それと、旧溝の掘方が確認できたレベルで上層、下層として取り上げた。出土量としては南半の上層からが一番集中して出土し、下層は少なかったが、溝底でほぼ完形に近い瓦器碗が出土した。出土した遺物は、土師器、瓦器碗、輸入陶磁器、須恵質・土師質・瓦質の片口やこね鉢、土師質鍋、瓦質甕、滑石製品、鞆羽口、棒状土製品がある。

土師器 (図版3、第8・9図)

小皿(20～59)口径8.1～10.4cm、器高0.8～1.5cm、底径6.1～8.9cmを測る。全て底部糸切りで、外底部の板状圧痕、内底部のナデは濃淡、形状の違いはあれ、共通している。底部と口縁部の境が糸切りしたままで稜を成すものと、境を撫でたり、内面から押ししたりして丸く、稜を無くしたものがあり、個数としては半分ずつである。口縁部と底部の境が稜を成すものは口縁部が太めで、短く、端部を丸く仕上げるものが多い。底部と口縁部の境が丸いものには34・53・39・24・41・23・58・54・44のように器壁を薄く仕上げるものがある。また、口縁部端を小さく外反させるものに、20・53・57・47・56がある。更に35・33・30は口縁部と底部の境内面を強く撫で、窪ませることで、内底部中央を盛り上げる。全て焼成は良好で、橙色を基調とするが、42・35・58・56は赤みを帯びたり、還元焼成の灰色を呈したりして硬質に焼成されたものがある。20・29・32・22・46には黒斑が認められ、25・31には口縁部に煤が付着する。

杯(60～71)口径15.4～16.8cm、器高2.3～3.5cm、底径9.7～11.7cmを測る。全て底部は糸切りで、板状圧痕が残り、内底部には不定方向のナデが認められる。60は完形品で、溝上層から出土した。口縁部は中位で広がり、端部は短く内湾する。61は完形に復元できたものであり、上層から出土した。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部が僅かに外反する。黄橙色で焼成良好。胎土に砂粒は含まず、精良である。62は底部と口縁部の一部を残す資料である。口縁部は中位下内外に口縁部を引き出す際についた指頭痕が爪痕も含めおびただしく残る。胎土は精良で焼成良好。63は直線的に開く口縁部は端部を丸く膨らます。胎土は精良で、焼成は良好である。64は内底部中心に渦巻き状に回転ナデ痕が残り、ナデは僅か。底部外面の板状圧痕は無い。65は1/3程を残す。口縁部は内湾気味に立ち上がる。外底部に楔形の圧痕がある。66は分厚く短い口縁部で、中位に稜を成す。67はほぼ完形で中央の下層から出土した。底部と口縁部の境は内外に指頭痕が著しく、底部が丸みを持つほど押さえている。内面から口縁部外面にかけて煤が付着する。68は器壁が均一で、直線的に開く口縁部である。北半の下層から出土した。ほぼ完形である。69は完形品で、上層からの出土である。直線的に開く口縁部で、基部を指で押さえた為、内外に指頭痕が残る。70はほぼ完形品で、南半の下層から出土した。内湾気味に立ち上がる口縁部は端部が波打っている。内底いっぱい横方向の強いナデを施し、そのせいか、外底には棒状の圧痕が深く刻まれる。胎土精良で焼成は良好である。71

も完形に復元できるもので、南半の下層から出土した。内底全体に不定方向の強いナデを施す。胎土は精良で、焼成良好。

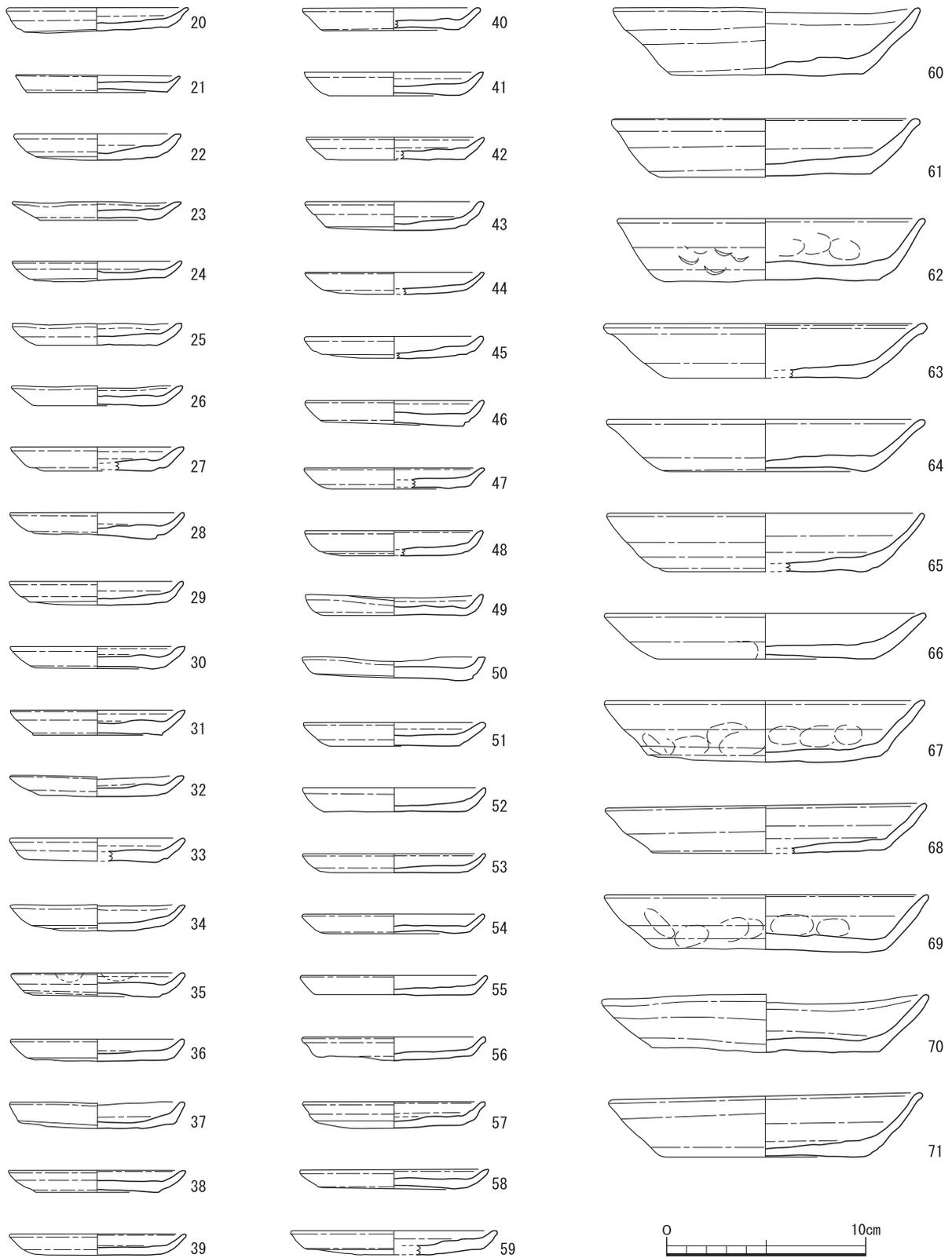
大杯（72）平底のもので、盤とすべきかもしれない。北半の下層から出土した口縁片である。口縁部は分厚い基部から立ち上げ、中位で外方へS字に引き出し、端部を肥厚させるが、上端は尖らし、その外方に平坦面を作りだす。口縁部中位外面には指頭痕が認められる。胎土は精製されるが少量の砂粒を含む。焼成は良好。

丸底の杯（73）底部のみの資料である。外面はヘラ削り、内面はヘラ状工具による研磨が行われる。胎土は精良、焼成は良好である。

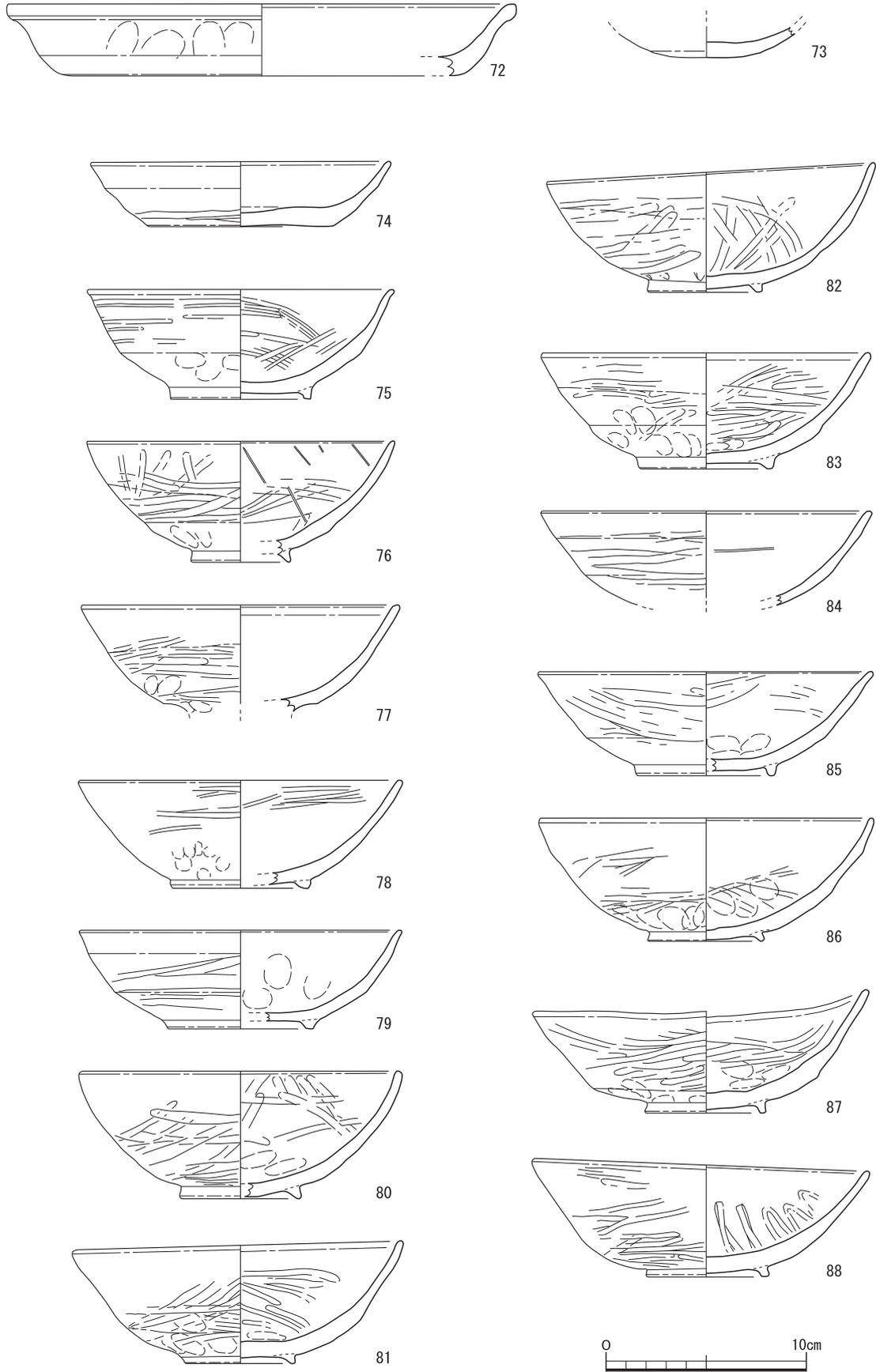
瓦器（図版3・4、第9～11図）

杯（74）北半の下層から出土した。1/4程を残す。形態的には土師器の杯と同様のもので、口縁部外面と内底部に数条の研磨が認められる。底部糸切りで、板状圧痕が残る。内外とも暗灰色で、銀化はしていないが焼成は硬質である。

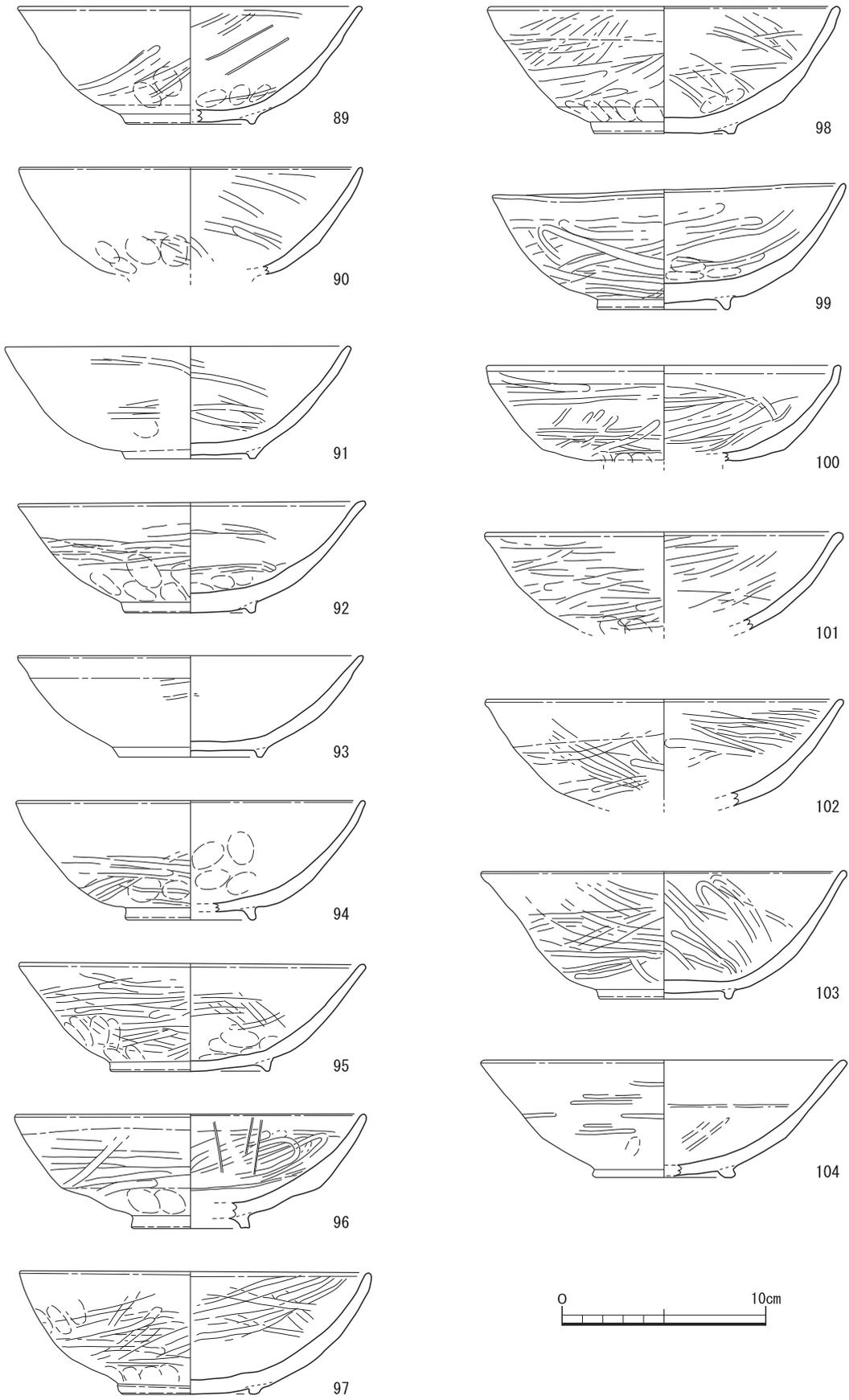
椀（75～114）75は口体部中位に屈曲を持ち、口縁端部は小さく外反させる。内面は細かい研磨が斜めに交差して粗く施され、外面は比較的広めの研磨が横方向に入る。76は体部中位の段は無く、内湾気味に立ち上がる口縁部は端部を丸く収める。内面にはヘラ状工具の当り痕があり、幅広の研磨、外面は横方向の幅広の研磨がそれぞれ行われる。内外灰白色で、口縁部のみ黒色化している。胎土に砂粒は含まず精良である。77は中位に屈曲はない。外面に粗い研磨を巡らす。胎土は精良。78は堅く焼き締まり、須恵器を思わせる色調である。内面は平滑で外面も糸切りの形跡が分からないほど平滑で、高台付近には縦方向のナデ痕が認められる。口縁部内外に横方向の研磨が施される。79は中位に屈曲があり、口縁端部は小さく外反する。内面は平滑だが研磨は不明。外面は口縁部上半に粗い研磨が施される。胎土は精良で、外面に銀化が認められる。80は外面の屈曲をヘラ削りにより丸く仕上げる。内面は平滑で、ヘラ状工具の当り痕と粗い研磨が、外面にも粗い研磨が残る。口縁部内外は銀化する。81は完形品で、南半上層から出土した。口縁部中位に屈曲があり、端部を小さく内湾させる。底部には押しつぶされた形ばかりの小さな高台が付く。外面は全体が黒色を呈するが銀化までは至っていない。内外に雑な研磨を施す。82は糸切りの底部を押し出す、器壁を薄く均一にし、途中の屈曲を無くしている。内外に雑な研磨を施す。底部外面の高台周辺には、高台貼り付け前に付いた指押さえの圧痕が放射状に残る。内底部は指頭痕が残り凹凸がある。83は体部途中に屈曲のあるもので、内面は平滑にする。85は中位に屈曲を持ち、端部を小さく外反させる。内面は全面煤が付くが銀化には至っていない。86は内底部を強く押して中位の屈曲を無くしている。底部外面の高台貼り付け部周囲に楕円状の圧痕が放射状に残る。内外に雑な研磨がされる。87はほぼ完形で、上層から出土した。口縁中位が屈曲する形態で、端部は器壁を薄くしながら直立気味に開く。内底は強く撫でられ凹凸があり、外底部はヘラ削りされる。内外とも雑な研磨が入る。焼成は堅緻で、焼け歪が著しい。88は内面がジグザグの雑な研磨、外面は下半に研磨が集中する。ほぼ完形で南半下層から出土した。89は破片資料。器壁は均一で薄い。内面はヘラ状工具の当りが多く残り、器面は平滑である。外面は基底部に研磨がある。胎土は精良。91は口縁の一部を欠く。口縁部中位の屈曲は目立たない。内外とも器面は平滑で、指頭痕による凹凸も少ない。雑な研磨が認め



第8図 SD01出土遺物実測図1



第9図 SD01出土遺物実測図2



第10図 SD01出土遺物実測図3

挿図番号	口径	底径	器高	色調 (内)	色調 (外)	備考	挿図番号	口径	高台径	器高	色調 (内)	色調 (外)	備考
小皿							瓦器椀						
20	8.1	7.2	1.3	黒色	茶灰色	内底黒斑	75	15.2	7	5.5	黒灰色	同	
21	8.3	7.1	0.8	乳橙色	同		76	15.3	5	6.1	灰白色	同	口縁黒
22	8.4	6.2	1.3	橙色	同	口縁黒斑	77	15.9			灰白色	同	口縁黒
23	8.5	6.1	1	暗橙色	同		78	16.1	6.7	5.4	暗灰色	同	黒斑
24	8.5	6.9	1	乳橙色	同		79	16.1	7.3	4.9	灰白・黒色	同	外面銀化
25	8.6	6.2	1.1	暗橙色	茶橙色	口縁煤	80	16.2	6	6.4	灰白色	同	口縁銀化
26	8.6	6.7	1	灰橙色	同		81	16.5	5.5	6	灰白色	黒色	
27	8.7	6.9	1.2	茶橙色	同		82	16.5	5.7	5.9	黒色	暗灰・黒色	放射状圧痕
28	8.7	7	1.2	暗橙色	同		83	16.5	6.7	5.8	灰白色	同	口縁黒
29	8.7	7	1.2	暗橙色	同	口縁黒斑	84	16.6			赤味灰白色	同	口縁黒
30	8.8	6.1	1.1	暗橙色	黒茶色	底黒斑	85	16.7	7	5.2	黒色	茶黒色	
31	8.8	6.5	1.2	暗橙色	同	口縁煤	86	16.8	5.9	6.2	灰白色	黒灰色	
32	8.8	6.6	1.1	茶橙色	同	口縁黒斑	87	16.8	6	5.2	黒灰色	黄灰・黒色	
33	8.8	6.7	1.2	暗橙色	同		88	16.9	6.1	5.6	灰白色	同	口縁黒
34	8.8	6.8	1.3	橙色	同		89	16.9	6.4	5.8	白色	同	口縁黒
35	8.8	7	1.2	橙色	黒灰・赤橙色		90	16.9			灰白色	灰白・黒色	
36	8.8	7.4	1.1	橙色	同		91	17	6.4	5.6	灰白色	同	口縁黒
37	8.8	7.9	1.3	明橙色	同		92	17	6.5	5.5	灰色	暗灰色	口縁黒
38	8.9	6.2	1.1	暗橙色	黒橙色		93	17	7	5	暗灰色	同	
39	8.9	6.4	1.1	暗橙色	橙色		94	17.1	6.5	5.9	灰白色	同	口縁黒
40	8.9	7	1.1	暗橙色	灰橙色		95	17.1	7.9	5.4	赤褐・黒色	乳橙色	
41	9	6.6	1.2	橙色	同		96	17.2	5.8	5.6	乳白色	同	口縁黒
42	9	6.8	1.5	橙色	黒灰・赤橙色		97	17.3	6.8	6.1	乳白色	同	口縁黒
43	9	7.1	1.5	橙色	同		98	17.3	7	6.3	灰白色	同	口縁黒
44	9	7.1	1.1	橙色	同		99	17.4	6.5	6.2	灰白色	同	口体黒斑
45	9	7.2	1.1	橙色	同		100	17.4			乳白色	同	
46	9	7.2	1.2	灰橙色	同	口縁黒斑	101	17.6			黒灰色	灰白色	
47	9	7.3	1.1	赤橙色	同		102	17.6			灰白色	同	口縁黒
48	9	7.4	1.2	橙色	同		103	18	6.5	6.8	黒色	同	外光沢
49	9	7.6	1.1	赤橙色	同		104	18	6.9	5.8	黒色	灰白色	瓦質
50	9.1	8	1.2	橙色	同		105	18.4	6.1	6.8	灰白色	同	口縁黒
51	9.2	6.7	1.2	橙色	同		106	18.4	6.5	6.4	黒灰色	灰白色	
52	9.2	7.2	1.2	赤橙色	同		107		5.4		黄黒色	灰色	
53	9.2	7.3	1	明橙	同		108		5.7		灰白・黒色	同	
54	9.2	7.3	1	赤橙色	同		109		5.9		灰白色	同	放射状圧痕
55	9.2	7.4	1	橙色	同		110		5.9		黄灰色	黄灰・黒色	放射状圧痕
56	9.2	7.8	1.2	橙色	灰橙色		111		6.1		乳灰色	黄灰色	放射状圧痕
57	9.2	8	1.4	暗橙色	同		112		7		黒灰色	暗灰色	
58	9.5	7.4	1	赤橙色	同		113		7.2		灰白・銀化	茶灰・黒色	
59	10.4	8.9	1.2	暗橙色	同		114		7.5		暗橙色	同	記号×
杯							その他						
60	15.4	9.7	3.5	茶橙色	同		挿図番号	口径	底・高台径	器高	色調 (内)	色調 (外)	備考
61	15.5	10.6	3	乳橙色	同	黒斑	1	16	11.1	2.6	赤褐色	同	杯
62	15.5	11	3.2	灰橙色	同		2	16	6.8	6.2	褐灰色	灰白色	瓦器椀
63	16	10.2	2.7	赤橙色	橙色		5	7.6	5.5	1.5	茶褐色	同	小皿
64	16	10.5	2.6	明橙色	同		6	11	7	3	赤褐色	同	杯
65	16	10.9	3	橙色	同		7		8.8		茶褐色	同	杯
66	16.1	10.9	2.3	暗橙色	同	口縁黒斑	8		8		暗橙色	同	杯
67	16.1	11.7	3.1	橙色	灰橙色	底部煤	9	7	4.6	2.1	茶褐色	同	小皿
68	16.2	11.6	2.5	乳灰色	同		10	7.6	5.4	1.6	赤褐色	同	小皿
69	16.3	11.6	2.8	赤橙色	同		11	12	7.7	2.6	褐色	赤褐色	杯
70	16.5	11.5	2.9	橙色	同		14	8.2	6.6	1.1	赤褐色	同	小皿
71	16.8	10.6	3.2	暗橙色	同		18		7.2		灰白色	同	瓦器椀
72	25.4	20	3.6	茶橙色	乳橙色	大型杯							
74	15	9.2	3.2	暗灰色	同	瓦器杯							

※色調 (外) の欄の「同」は内面と同じ意

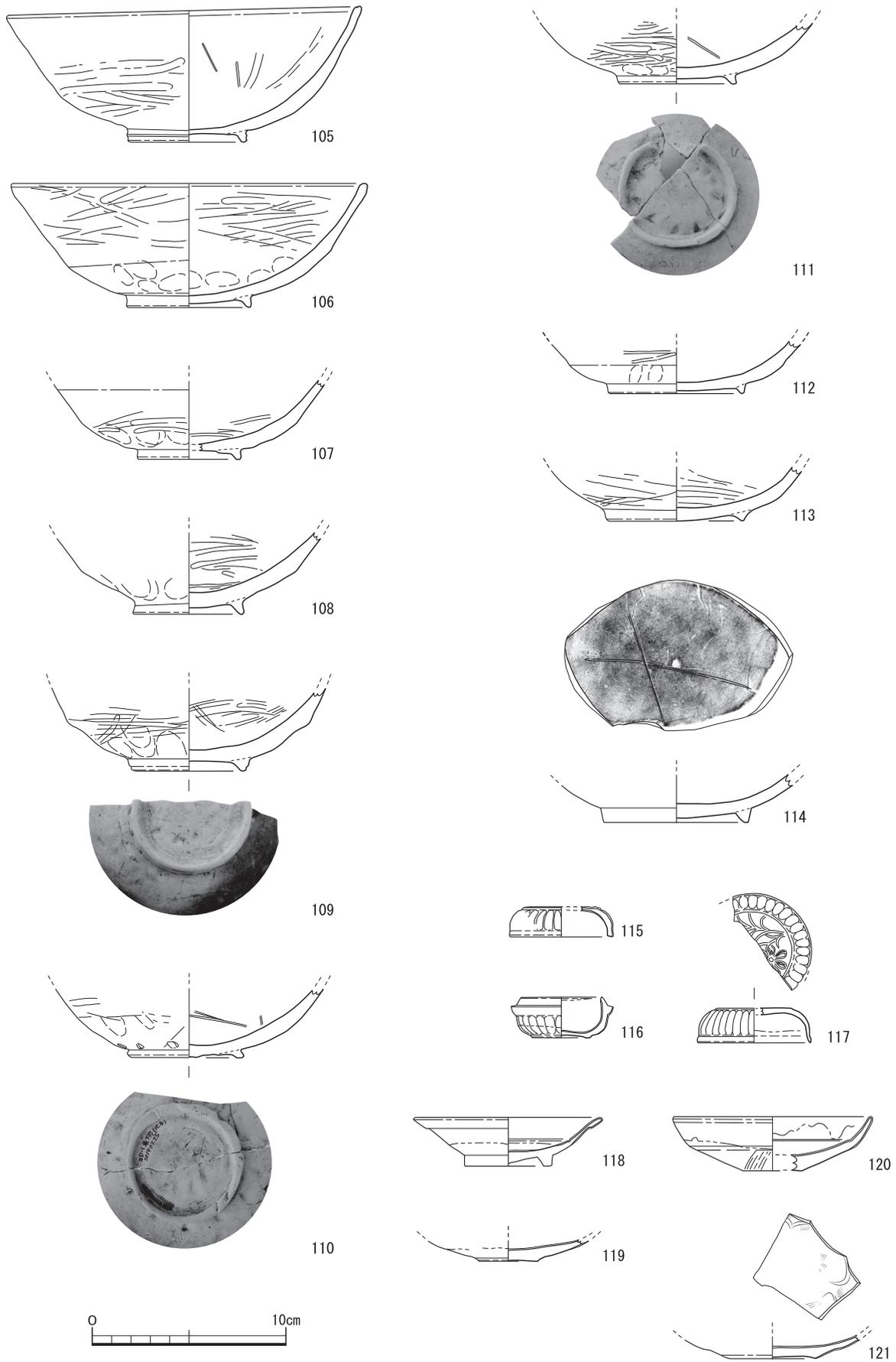
第1表 出土土器法量表

られる。92は口縁の一部を欠く。器壁は底部から口縁端部に向かって薄くなり、中位の屈曲は目立たない。底部内外に指頭圧痕が多く残る。93は全体的に器壁が薄く、口縁部中位の屈曲は目立たない。内面は平滑であるが、研磨の痕跡はない。灰色で、須恵質の様相を呈す。95はほぼ完形で、上層からの出土である。内外に赤橙色を呈する部分があり、焼成は不良である。96は大略1/3を残す。口縁部中位の膨らみが顕著で屈曲している。内面にへら状工具の当りが夥しく、器面を平滑にした上で雑な研磨が施される。外面は底部の糸切り痕がはっきり残るほど調整がなされない。内外とも雑な研磨。97は底部から均一な器壁で内湾して立ち上がる口縁部である。低く形ばかりの高台が付く。乳灰色を呈して、焼成は不良である。98は中位に屈曲を有する口縁部で、端部を僅かに外方へ引き出す。内面は平滑にした後、雑な研磨を施す。屈曲部下位に指頭圧痕が廻る。99は完形品で、調査区南端の下層から出土した。口縁部中位の屈曲は無く、内湾しながら立ち上がり端部を丸く仕上げる。内外とも雑な研磨を施す。高台貼り付け後の高台内に3条の細線がへら記号様に引かれる。内外とも灰白色に黒斑があり、焼成は良好である。100は1/3を残すが、高台を欠く。口縁端部をヨコナデにより内傾させるので、端部内面に凹面を作り出し、外面に稜を成す。103は器壁を均一に薄くし、口縁部を引き出して深めの椀としている。口縁端部はやや外へ広がり丸く膨らみます。内外の研磨はジグザグに雑に施されるが、研磨した個所は光沢を発している。高台は丸く小さいが、しっかりした高台が付けられる。胎土は精良で、焼成は良好である。104は太い高台が付く。口体部は内湾しながら開き、端部を僅かに膨らみます。内面は平滑にし、へら状工具の当りが残る。外面は黒色化しているが、銀化には至っていない。106は深めで、中位の屈曲は目立たない。口縁端部は膨らませて直立気味とするため、端部内面に凹面を作る。内外とも雑な研磨が施され、高台付近の内外に指頭痕が残る。107は高台を含む断片資料で、硬質に焼成されたもの。外底部に指頭痕がある。断面三角形の鋭い高台が付く。胎土は精良である。108は高台部の小片である。分厚い底部の内面は平滑にされ雑な研磨が施される。外面には高台の周辺に小豆状の小さな窪みが放射状に回る。109は口縁中位に屈曲を残す高台周辺の断片資料である。外底部高台内に小豆状の小窪みを放射状に残す。110は高台の断片資料。底部外面高台の廻り及び高台内に小豆状あるいは楔形の小窪みが放射状に回る。111は底部の資料で、楕円形の雑な高台が付けられるが、高台内に楔形の圧痕が放射状に残る。圧痕の一部は高台の外側にも伸びる痕跡があり、糸切り後の底部に付いたものかと思われる。外面底部付近に指頭痕は認められず、横方向の研磨が雑に施される。内面は平滑で、へら状工具の当り痕が認められるが、研磨は施されない。113は比較的形の大きい断面三角形の高台を貼り付ける。内底部は平滑にするが中心付近は撫でている。一部銀化している。外面は糸切りの痕跡が残り、指頭痕は見当たらない。114は底部片である。内面は平滑にする。内底部には細線によるへら記号様の×字が付けられる。

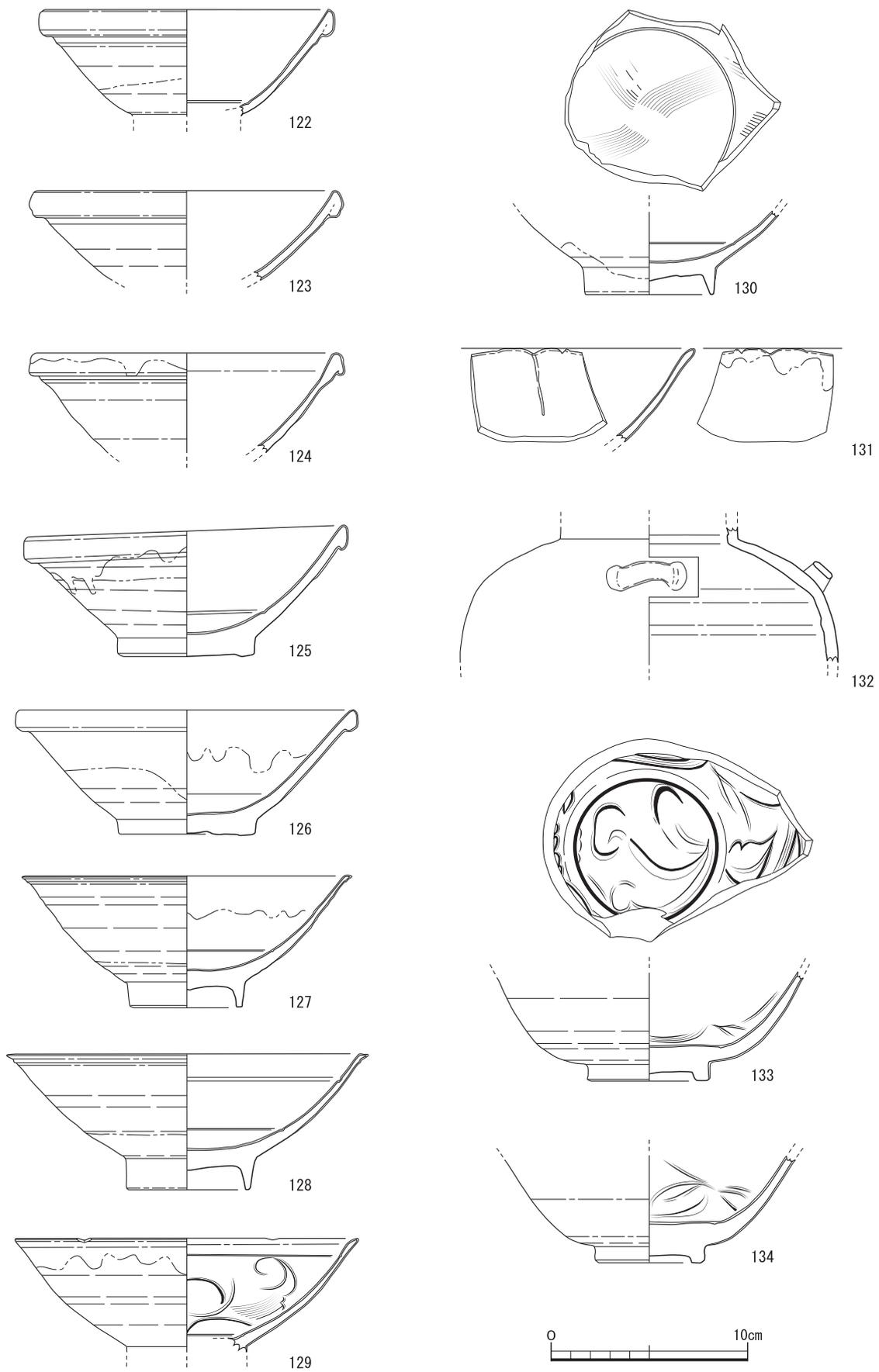
輸入磁器 (図版4、第11～13図)

青白磁 (115～117) いずれも合子。115は蓋の破片で、口縁部端から内面は無釉。116は身で半分を残す。蓋受け部、外面体部下半から底部は無釉。117は蓋で半分を残す。天井部に草花印文を施し、青味のある白色透明釉をかけるが、口縁端部内面は無釉である。

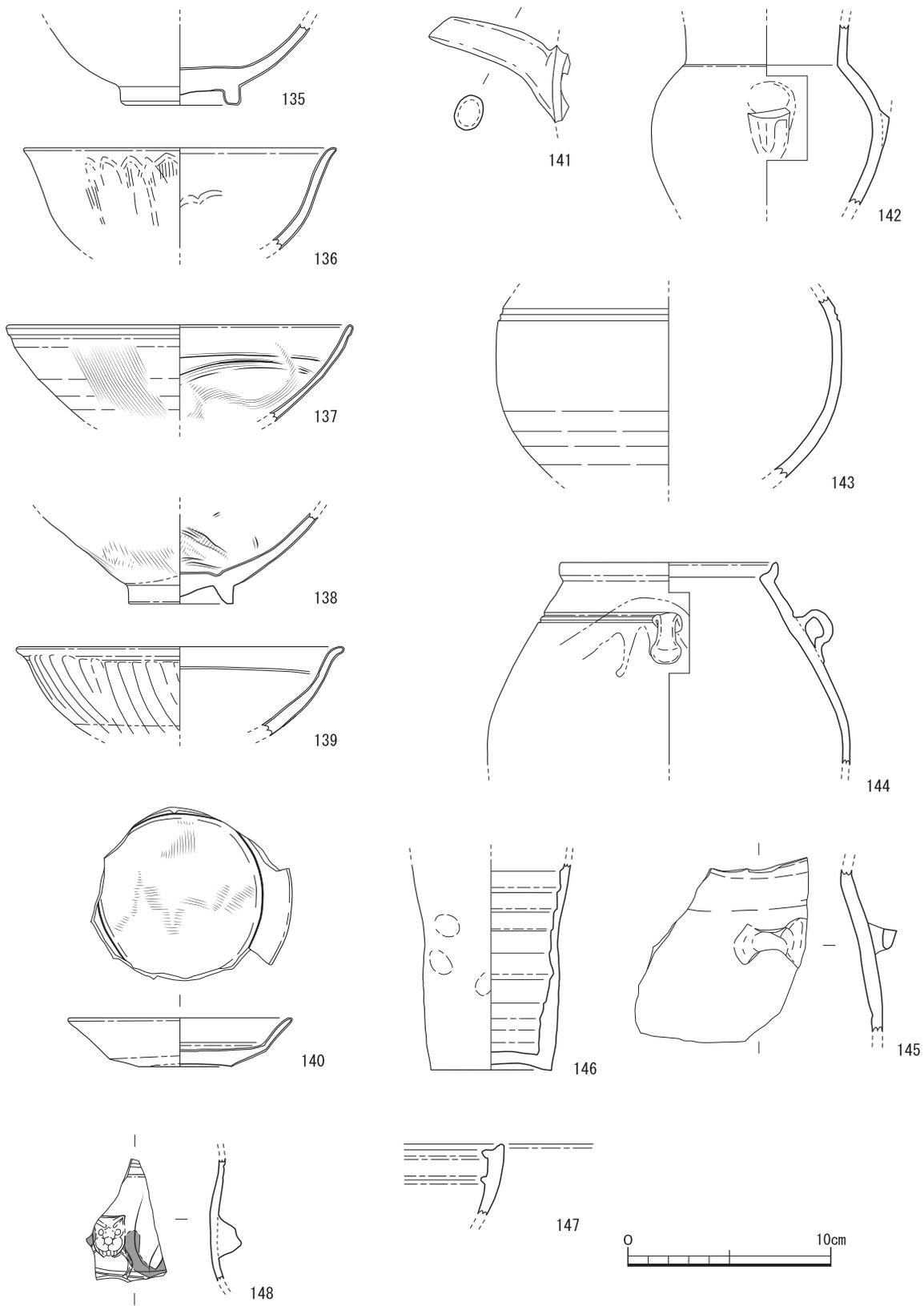
白磁 (118～132) 118は小皿で口縁の一部を欠く。断面方形の高台を削り出し、口縁部下外面に



第11図 SD01出土遺物実測図4



第12図 SD01出土遺物実測図5



第13图 SD01出土遺物実測図6

小さな凸線を廻らす。鶯色の透明釉を施すが、見込みは蛇の目釉剥ぎし、外面下半は無釉である。119は小さな底部を僅かに窪む平底に削り出す。黄色味を帯びた透明釉をかけるが、外面下半は掻き取って無釉である。見込みに白線の模様があるが判然としない。底部片の資料で全様は不明だが皿VI類か。120は小さな底部は平底をなし、厚めの底体部から直立気味に屈曲する口縁部に至る。その境の内面には沈線が廻り、外面は稜を成す。濁った薄鶯色の釉を施すが、外面の底体部と口縁部の境より下部は釉を削り取る。121はやや窪む平底を成す。青味を帯びた白色釉を全体に施すが、底部外面は掻き取っている。全体に細かな貫入が入る。内底部に篋書きによる螺旋状文が入る。底部のみの資料で全様は知れないが皿VI-2 a 類か。122～126は口縁部を折り返して玉縁とするもので椀IV類に属す。122は口縁片であるが、玉縁下に1条の凸線を削り出す。口縁部と底部の境に沈線を巡らす、胎土は黒細粒が混じるものの白色で密である。白色釉を施すが、外面下半は施釉されない。123は口縁部片。灰味を帯びた白色透明釉がかかるが、外面下半には施釉されない。胎土は灰色で、気泡が認められる。125は完形で、溝下層からの出土である。高台は浅く削り込まれるのみで、中心部は高台周辺と同じ高さとなり、不安定で座りが悪い。見込みに沈線を巡らす。黄味を帯びた釉が比較的厚めにかけて、内外に釉垂れが残る。釉は口縁部下まで、以下底部まで施釉されない。釉には細かい貫入が入る。126は全体の半分ほどを残す。溝の最下層から出土した。外面の口縁下をへら削りするが、器面は滑らかである。高台は周辺を浅く削り込むだけで、中心部と高台外周は同じ高さなので、すわりが悪い。内面は口縁部と底部の境に沈線を巡らす、更に内側の見込みには段を有する。胎土は灰色で密だが、気泡が多く入る。緑味を帯びた釉をやや厚めにかけて内面口縁部下に釉垂れがある。釉は外面下半まで施釉されるが高台は無釉である。127・128は口縁部端を水平に引き出し嘴状にする形態で、高台を細く高めに削り出す。椀V類に属する。127は外面口縁部下からへら削りされるが丁寧である。内面に沈線を1条廻す。灰色を帯びた透明釉をかけるが外面高台部付近は無釉である。内面口縁下に釉垂れが認められる。128は内面口縁下に細い沈線を廻す。胎土は赤味があり焼成不足である。高台付近を除く全体にかけてられる釉も、黄色がかって発色が良くない。見込みに目跡らしきものが付着する。129は高台を欠く資料である。口縁は輪花があり、内面に櫛やへらで草花文を描く。見込みに沈線を廻らし底部と口体部の境をなす。オリーブ色を帯びた白色透明釉が高台外面まで全体にかかるが、口縁部内外には釉垂れがある。椀VII類に属する。130は高台のみの資料である。高台の特徴から椀V類と思われる。見込みに細い沈線風の段を有する。内底部に櫛書きの施文がされる。焼成は不良で、胎土はレンガ色、釉は本来の発色はせず、光沢の無い灰味の白濁色を呈す。高台外面まで施釉される。131は口縁部片である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を小さく外反させる。輪花があり、内面を白堆線で区画する。白色の透明釉がかかる。132は耳壺の肩部の断片資料である。平紐状の粘土を横方向に貼り付け耳としたものである。緑味のある白色透明釉を内外とも施す。良品である。

青磁（133～140）133～136は龍泉窯系の青磁椀である。いずれも椀I類に属す。133は内壁に蓮華文、見込みに沈線を廻らし、中に花文を描く。外面は無文。濃いオリーブ色の釉を厚めにかけて、高台暈付及び高台内は露胎である。134は内壁に蓮華文がへら書きされるが、見込みには文様は無い。外面も無文である。茶味のあるオリーブ色の釉を厚めにかけて高台外面まで施釉され、

畳付及び高台内は無釉である。135は内外とも無文。薄緑色の厚い釉が全体にかかる。高台には施釉されないが、一部、畳付を超えて高台内まで釉垂れが及んでいる。136は口体部の断片資料である。内湾気味に立ち上がる口縁部は端部を緩く外反させる。外面には櫛目を入れ、鏝のある蓮弁文を廻らす。内面は釉が飛んではっきりしないが、へら書きの線文が窺える。濃いオリーブ色の釉をかけるが、黄茶色に濁る。椀Ⅰ-6類に属すると思われる。137～140は同安窯系青磁である。137は口縁部の破片資料である。器壁は薄く内湾気味に立ち上がる。外面には細かい櫛目文が入る。内面は口縁下に沈線を廻らし、櫛やへら状の工具で花文を、合間に櫛でジグザグの櫛刺突雷文を施す。138は椀Ⅰ類に属するもので、高台部分の破片資料である。高台内は中心部をへそ状に削り残す。内面は見込みに段が廻り、ジグザグの櫛刺突雷文とへら書きの線文が見られる。外面は高台近くまで延びる櫛文が施される。緑茶色の透明釉がかけられるが、高台近くまでで、高台及び高台内には施釉されない。139は口縁部の破片資料。丸く立ち上がる口縁部は端部を外反させる。内面口縁部下に薄い沈線を巡らす。外面には幅広の櫛文を縦方向に施文するが、内面は無文である。灰色味のある緑色釉をかけるが、外面は中位までで留まる。椀Ⅲ類か。140は皿Ⅰ類に属する。体部中位で屈曲し、内面に段を成す。口縁部は外反し端部は尖らず。見込みに細かい櫛目文とジグザグの櫛刺突雷文を入れる。青緑の透明釉を全体にかけた後、外底部の釉を削り取っている。

輸入陶器 (図版4、第13図)

褐釉陶器 (141～146) 141～143は水注。141は注口で、中位で少し屈曲する。基部から口端に向かって面取り風に平行線が入る。暗茶褐色の光沢のある釉がかけられるが、注口内まで施釉が及ぶ。注口貼付部の体部内面にも施釉される。142は直立する口縁部を持つもので、球形の体部片である。肩部に貼付文が付くが半分ほどが剥落し詳細は不明である。光沢のある茶褐色の釉が全体にかけられるが、内面は無釉である。胎土は黒灰色で、黒色の気泡状のものが夥しい。143は球形の胴部の破片資料である。肩部付近に2条の沈線を巡らす。胴部下半はへら削りが施される。内外とも施釉されるが、光沢の無い濁った鶯色を呈す。144は耳壺。内傾する口頸部に外反して端部を上方につまみ上げる短い口縁部を付ける。端部内面に段を作り、外面に稜をなす。頸部外面には2条の沈線を廻らし、この沈線の下端に耳を貼り付ける。耳は平紐状の粘土を丸くし、縦方向に貼り付けるが丁寧な造作である。残存部から耳は4か所に付く四耳壺である。内面はヨコナデされ、器壁を薄く仕上げている。内外に緑味の灰色透明釉がかかり、その上から褐色釉で波状文を引き釉垂れをさせて模様としている。口縁部内面に白色の目跡が廻り、重ね焼きの痕跡を残す。145は耳を横方向に付ける。外面に茶褐色の釉を施すが、はじけ飛んでいて、残りは部分的である。内面は施釉せず胎土は茶味のある灰色である。146は細長い徳利形の瓶の底部と思われる。底径は7cmで、上げ底気味となる。体部は、あまり膨らまずに挽き上げられ、内面には轆轤目が段を成して残る。外面には光沢の無い茶灰色の釉が薄くかけられるが、発色は不良である。147はこね鉢の口縁部小片の資料である。直立気味に立ち上がる口縁部で、端部を窪ませる。内面には二条の凸線を廻らせる。胎土は粗く、白色砂を多く含む。灰茶色で、無釉である。

緑釉陶器 (148) 頸部から直立する口縁部にかけてと推定される断片資料である。頸部から直立し、僅かに口縁部が開く。口縁部に2条、頸部に2条の細い沈線を巡らす。頸部に環を銜えた獅子

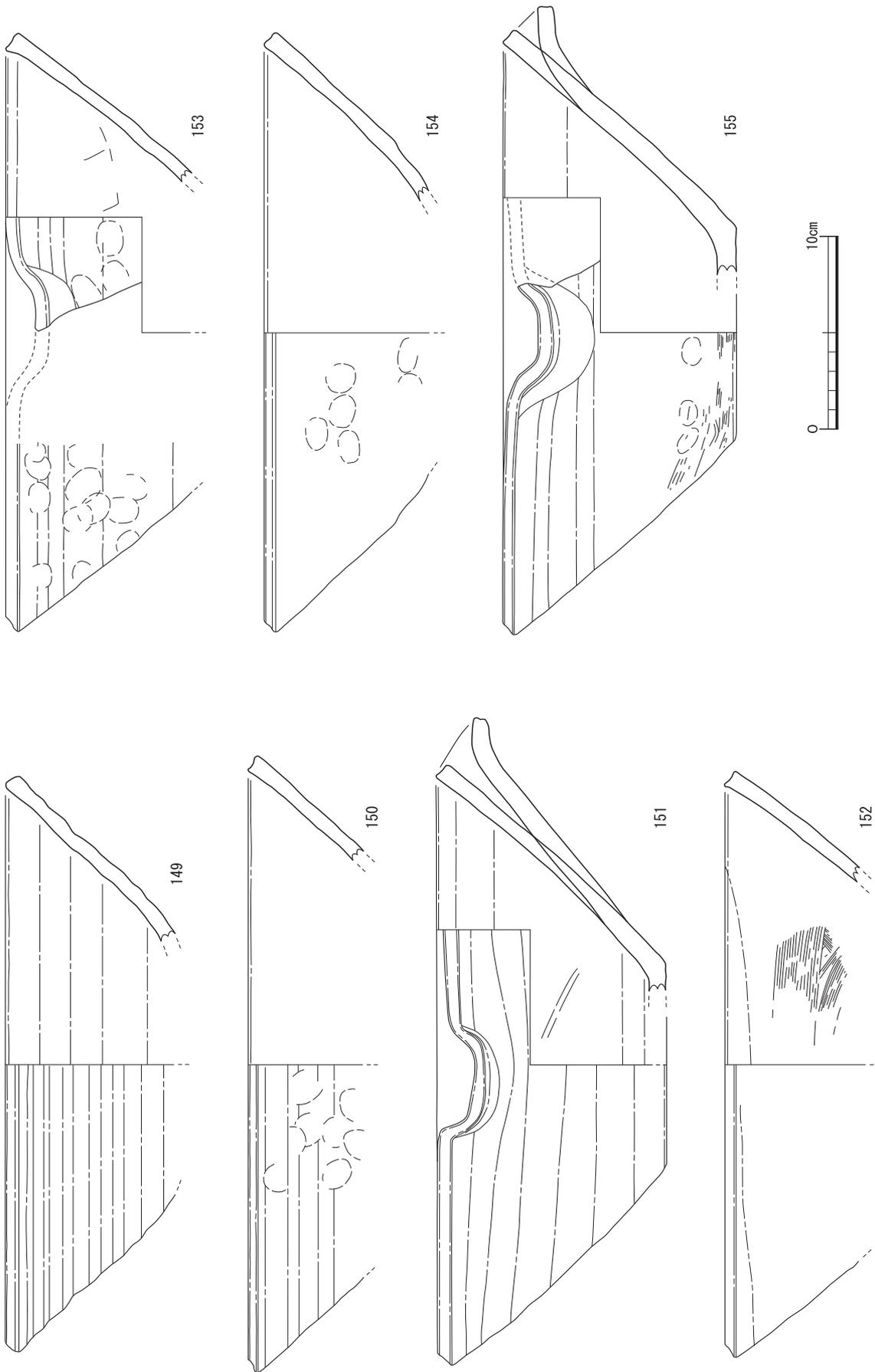
の頭が貼付され、その横には木の葉文様が線刻される。外面全体に薄い緑色の釉がかけられ、更に、獅子頭の両横から筆ではねたような施文がされる。濃い緑釉で描かれているが、こげ茶色を呈する部分もある。内面は茶色で黒点が多い。胎土は灰色で精製されている。博多遺跡群199次調査で類似品が出土している^{註1)}。

雑器（図版5、第14・15図）

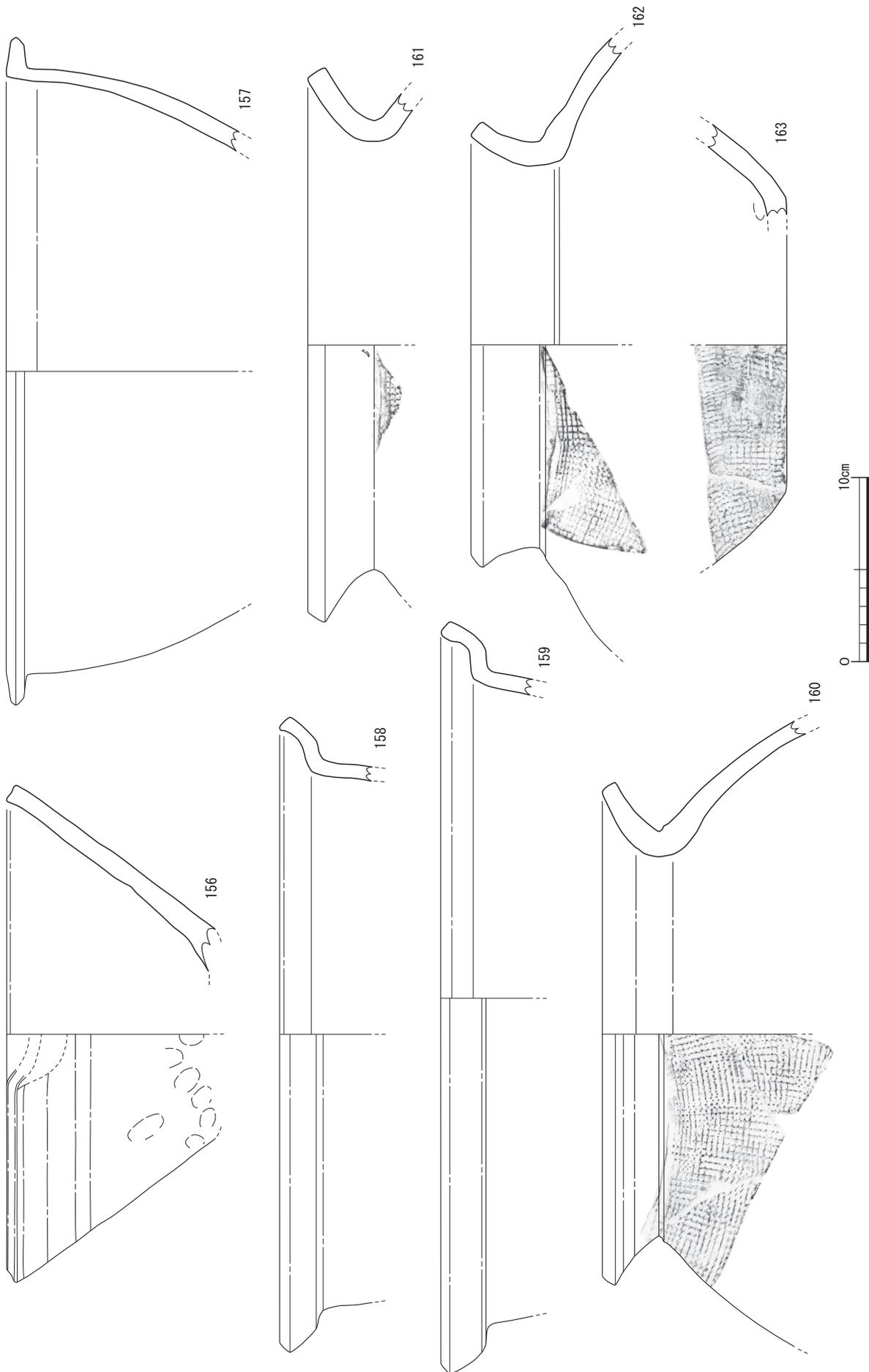
鉢（149～156）いずれも内面に条痕は無く、破片資料もあるが、特徴が類似しており、片口を成すものと思われる。149・150は須恵質で、直線的に開く口縁部の破片資料である。149は端部を上方へ突き出し、外面に平坦面を作る。粘土紐を巻き上げた凹凸が顕著である。内面は使用して平滑になっている。内外灰色で、端部外面は黒色を呈する。150は口縁端部を上方へ尖らせ、端部に凹面を作り出す。内外ともヨコナデするが、内面下半は摩耗している。胎土に砂粒を多く含む。黒灰色を呈し、焼成は良好である。151は土師質のもの。底部を欠く資料である。口縁端部は150のそれとよく似ている。口縁は一部を方形に押し下げて片口を成す。ほぼ直線的に延びる口体部は底部との境に明瞭な稜を成す。内面は使用して平滑だが、外面は指頭痕で凹凸が著しい。胎土に砂粒は少なく精製されている。口縁部外面に煤が付着する。152～156は瓦質のものである。直線的に延びる口体部と上端を尖らせ、外面を窪ませる口縁端部の特徴は共通する。152は口縁部の破片資料。端部が内面に小さく突き出す。内外とも灰黒色を呈し、焼成軟質。153は片口部分を含む口縁片である。外面は指頭痕が著しく、内面はナデによる仕上げである。胎土は灰白色で、精製される。全体的に黒色化され、焼成は良好である。154は口縁部片の資料。外面は指頭痕が著しく、内面はヨコナデによる調整が施される。灰白色で焼成は良好。155は全体の略1/2を残す資料である。方形の片口を成す。口体部と底部の境は刷毛状の工具で、粗く削られ、角を無くす。外面は指頭痕が残り、内面はヨコナデされるが、下半は使用による摩滅で平滑である。内外とも黒灰色を呈するが、胎土は灰白色で精良である。焼成は良好。156は口体部の破片資料。片口部の残片を残す。外面は茶灰色、内面は黒灰色を呈す。内面は使用の為か器面の剥離が著しい。胎土にやや大きめの砂粒を含み、焼成は良好である。

土鍋（157～159）157は口縁部の断片資料。丸みのある体部からほぼ直角に外方へ引き出す口縁部で、器壁を厚くし端部は平坦面を作り出す。端部上面はやや窪ませる。内面は口縁下2cm程まではナデ調整され、下位は刷毛状工具による削りが認められる。外面は煤が付着するが、口縁下付近が著しい。胎土は粗く、砂粒の混入が著しい。158・159は二重口縁状の破片資料である。復元口径が大きいので、挿図は2点とも1/4の縮尺で掲載した。158は復元口径が46cmを測るものである。口縁部は外へ開き丸く内湾して立ち上り、S字状を成す。端部は内面に小さく突き出し、外面に丸みを帯びた平坦面を作る。内外とも煤が付着する。159は復元口径54cmを測る大きいものである。口縁の形態は158とよく似ているが、中位の屈曲が直角近くになる。内面は灰白色、外面は黒灰色を呈し、焼成は軟質である。

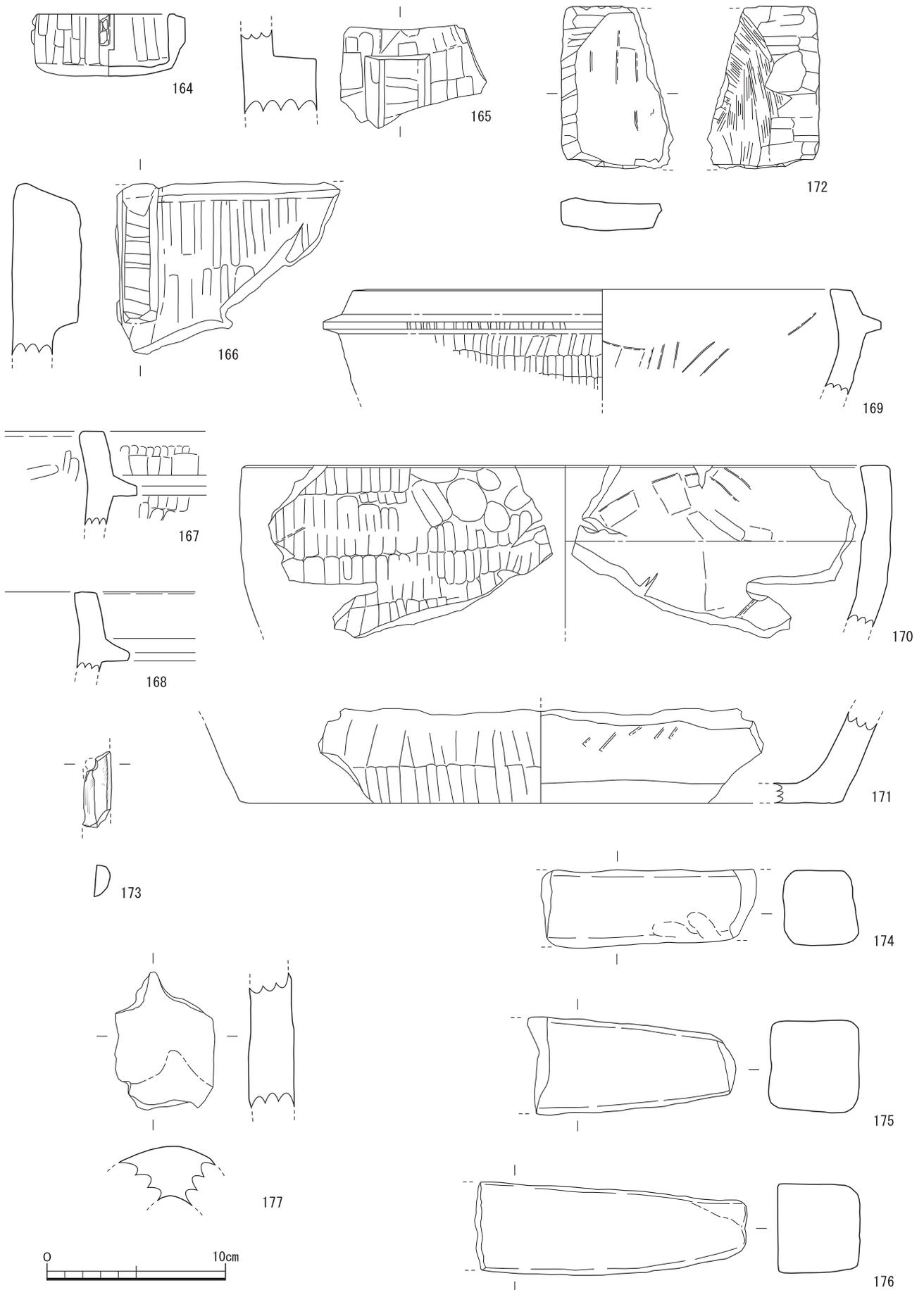
甕（160～163）いずれも瓦質に焼成されたもので、口縁部は大きく外反させ、端部は断面方形にし、端部外面を僅かに窪ませて凹面とするものである。160は比較的形態を留めるものである。



第14図 SD01出土遺物実測図7



第15図 SD01出土遺物実測図8 (158・159は1/4)



第16図 SD01出土遺物実測図9 (169・170は1/4)

内面は後円部外面までヨコナデ調整し、外面には格子の叩き痕が後円部の境ギリギリまで残る。茶黒色で、焼成良好。胎土に砂粒を含む。161は体部の破片は多く出ているが、口縁部が1周しただけで、以下の復元ができなかった。口径30cmの大きさである。内外ともヨコナデ調整される。黒茶色を呈し、焼成は良好である。162も格子叩きを頸部ぎりぎりまで施し、内面は撫でるが、同心円様の叩き痕が僅かに残る。内外とも黒茶色を呈するが、胎内は黒色と白のサンド状態で砂粒を僅かに含む。163は底部の資料。いずれかの口縁部の底部になると思われるが、直接接合できなかった。復元底径16cm程を測る。平底で、体部の格子叩きは底部との境まで及ぶ。内面は底部貼付の指頭痕が強く残り、その上から撫でているが、凹凸は顕著である。胎土は黒色で、白砂粒を多く含む。焼成は良好である。

滑石製品（図版5・6、第16図）

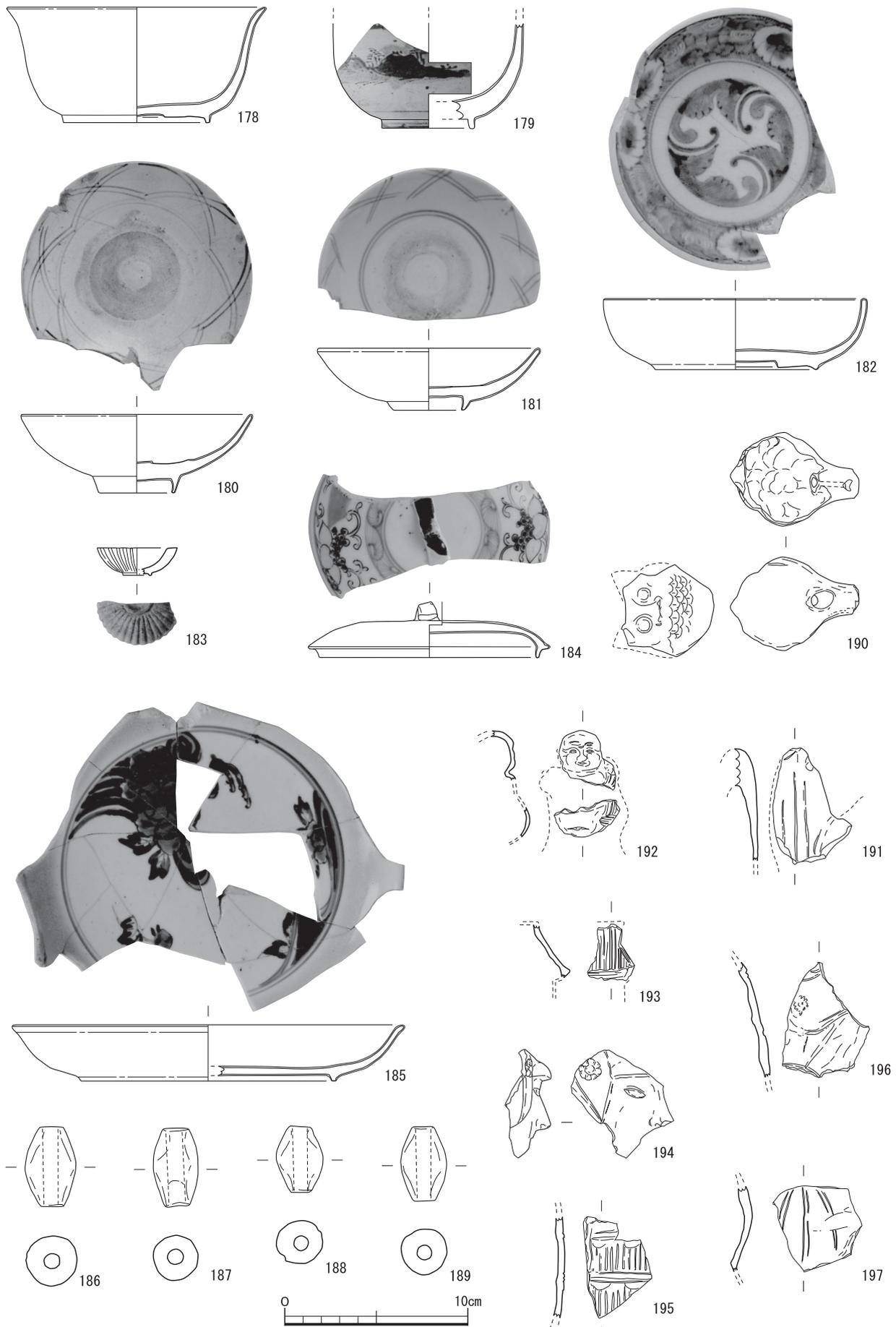
石鍋（164～171）164は口径9cm程のミニチュアであるが、外底部に煤の付着があり、実用されたものと思われる。縦長の耳が4か所に削り出されるが、削り出しは浅く、装飾的である。内外面とも縦方向の削りの後研磨、底部外面は丸みを帯びて研磨される。165は断面方形のどっしりした縦方向の耳が削り出される。内面は研磨、耳は角が面取されるなど、丁寧な作りである。破片4周を削っており、2次製品を作りかけたものである。外面は煤が付着する。166は口縁部の断片である。口縁部から連続する縦耳が削り出されるが、細身である。外面は細かい縦方向の削り、内面は研磨される。耳は角を面取りし、細かい横方向の削りが施される。黄茶色が混じり粗悪な石材である。167は鏝のある石鍋の口縁片である。薄手で、1.5cm程の幅の鏝は丁寧に削り出される。外面は削りの跡が残るが、内面は削り痕が見られないくらい丁寧に研磨される。鏝の外端まで煤が付着する。168は内面が光沢が出るほど研磨される。169は口径38cmほどに復元される口縁部である。挿図は1/4の縮尺で掲載した。出が1cm程の短い鏝が廻る。鏝上面から内面は研磨され、外面は短い縦の削りを規則的に回す。鏝端部は縦に細かく削り、刻目状とする。鏝の外面まで煤が付着する。170は内湾気味に直立し、端部を平坦にする、厚さ2cmの分厚いものである。口縁端から13cm程下まで残す破片だが、その限りでは鏝や耳は付かない。口径は復元すると50cm近くになり、挿図は1/4で掲載している。煤の付着は無い。171は底部の資料である。平底で、体部と比べると半分の器厚で薄い。外面に煤の付着顕著。

再加工品（172・173）172は石鍋の体部を四角に切り取って硯としたものである。鍋の内面のカーブを生かして、周辺を削ることで球状に窪んだ硯面を作る。また、鍋の外面だった部分の中央部を粗く削り取って平坦にし、硯の座りを良くしている。2辺が割れているので全様は分からないが、球状の硯面はツルツルである。173は丸く棒状に削り、穿孔するものである。割れていて全様は分からないが、ペンダントのような装飾品かと思われる。

土製品（図版6、第17図）

棒状土製品（174～176）いずれも断面が正方形の棒状の製品である。175・176は一方が細くなり、176は細くなった端部に切り込みを入れ嘴状としていて、煤が付着する。

鞆（177）羽口の断片である。部位は不明だが、外面は黒灰色、内面は赤灰色を呈し、強い火力を浴びている。



第17図 その他の出土遺物実測図 (186～189は1/2)

(4) その他の出土遺物 (図版6、第17図)

本調査区では中央部でかなり大きい攪乱が認められた。家屋の廃材を焼却したような灰、瓦礫があったが、同時に廃棄されたと思われる江戸末の染付から明治・昭和初期の土人形などの出土があり、遺構は検出しなかったものの集落の継続を示すものとして、若干紹介しておく。

陶磁器 (178～185) 178は白磁の大ぶりの椀ないしは鉢の破片資料で、S字に湾曲し、端部が外反する口体部を持つ。蛇ノ目凹形高台で、高台内は蛇ノ目状に釉を搔き取る。白色釉を刷毛状のもので横方向に施釉する。179は京焼風の施釉陶器である。器壁の厚い丸形椀で、外面は白色の釉に呉須で山水文を描く。低い高台の外面と底部外面に圈線を廻らす。内面は黄色を帯びた光沢のある白色釉をやや厚めにかける。180は弧状の体部に細い内湾気味の高台が付くものである。口縁部は内湾して、細く尖り気味の端部をなす。高台畳付を含む全体に灰色がかかった白色釉がかけられ、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。内底に二重の圈線を回し、その上方に松葉文を花卉様に廻らす。外面に細かな貫入が入る。181は丸味のある浅い皿である。高台は内面が直立し、深く挟り込む。全体に青味のある白色釉がかけられるが、畳付には施釉されない。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ、外側に二重の圈線がまわる。口縁内面には端部に掛かって松葉文がランダムに入れられる。高台畳付に砂目跡が残る。182は直立気味の口縁部で、輪花を成す。高台は蛇ノ目凹形高台で、高台は低く小突起状である。高台内は蛇ノ目釉剥ぎされ、中央部に簡略化された銘がスタンプされる。小さい高台外面に2条、やや上方に1条の圈線が廻り、唐草文が施される。内面は見込みに白抜きの蛇ノ目が廻り、内側に荒磯文を描く。内側面は水色の濃に白抜きのぼやとした花文が散りばめられる。183は紅皿。外面は貝殻状に型押しされる。口縁端部は中央が窪む平坦面を成し、この外側端部から内面は光沢のある白色の釉がやや厚めにかける。底部には輪状の小さな高台が付けられる。184は色絵蓋物蓋の断片資料。天井部に幅1cmの渦様文帯を廻らし、その中央にチップ状の粘土紐を貼り付けてつまみとする。片辺には朱色による草花実が描かれ、つまみには赤色が塗られる。全体に白色釉がかけられるが、身受け及び返り端部内面は無釉である。185は復元口径が21.5cmを測る大皿。体部はゆるく内湾しながら立ち上り、端部を短く外方へ引き出す。見込み全体に2条の圈線に囲まれて草花文が描かれる。色調は口縁部内外が薄い緑色、他は白色を呈する。外底高台内には『天明成化年製』の銘が入れられる。

土錘 (186～189) いずれも円筒形の土錘で、中位が膨らむ。長さ2.2～2.7cm、最大径1.5～1.7cmを測り、均一である。器面は撫でて平滑にし、両端穿孔部は小さな平坦面を作るなど、一つひとつ丁寧に仕上げられている。赤橙色～白橙色を呈し、焼成は硬質である。

土人形 (190～197) 190～193の胎土は微細な金雲母を含む精製土で、硬質な酸化気味での焼成で淡橙褐色を呈す。胎土から江戸末～明治期の博多系の製品と考えられるが、津屋崎産の可能性も否定できない。190はモマ笛(鼻)。型合わせ目部分から下部が残存する。現在、津屋崎人形で人気となっているモマ笛よりも鳥らしい古式の造形をしており、変遷を知る上で貴重な遺物である。191は稲荷様(狐)の尾部分で外面に胡粉が残存する。192は布袋様。顔面と腹部分が残存する。193は家型ミニチュア。茅葺屋根を造形しており、箱庭道具と考えられる。

194～197の胎土は微細な金雲母を含む緻密な精製土で、硬質な酸化気味の焼成で淡褐色を呈す。

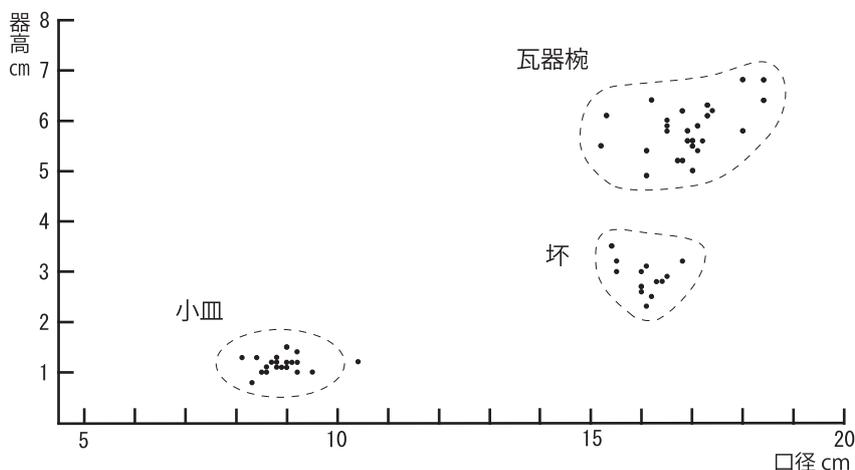
近年、博多遺跡第213次調査（博多冷泉町）で博多人形の源流を作った中ノ子系の窯場が発見され、大量の人形が出土している。大型の人形が多く、目等の意匠の特徴に類似する点があることから、博多中ノ子系の大型武者人形の「太閤」で、高さ46cm程度に復元され、原型は明治期のものと考えられる。194は顔の右側部分で、兜の鉾が確認できる。一部に下塗りの胡粉が残存する。195は鎧の大袖部分。196は鎧の大袖下端と左腕の一部。大袖下端部に鉾が表現されている。197は兜鉢（筋兜）の右側頭部にあたる。同型のものは津屋崎人形にも見られる。

IV まとめ

宝松遺跡では過去に3次の調査を実施している。第1次・2次調査は飯塚大野城線沿いで、今回調査地点の東50m、125mで行われ、3次調査は南東方向へ325mの所で行われている。1次調査では17世紀代の区画溝と思しき溝と近世以降の畠状遺構が見つかり、2次調査では中世に属す溝、3次調査では弥生期の溝と土坑が検出された。今回の調査では平安時代末の区画溝とそれと方向を同じくする掘立建物1棟、その他土坑やピット群を検出したが、前3回の調査とは趣を異にしている。遺跡の内容から見て、『宝松遺跡1』^{註2)}で編者が述べているように、宝松遺跡の中でも北に接する御笠の森遺跡との関連が強く窺える。とまれ、ここでは今次調査の注目点について若干のまとめをしておきたい。

まず出土遺物であるが、調査区の東辺で検出したSD01から大量の土器類、陶磁器類、滑石製品が出土した。埋没した経緯は不明だが、溝底から溝埋土の上層下層問わず出土しており、一度に投棄されたようである。出土した器種は土師器小皿・杯・大杯、瓦器杯・椀、青白磁合子、白磁皿・椀・耳壺、青磁皿・椀、緑釉陶器、褐釉水注・耳壺・瓶、陶器鉢、こね鉢（須恵質、土師質、瓦質）土鍋（土師質、瓦質）、瓦質甕、滑石製鍋、ミニチュア石鍋、石鍋再利用品（硯、ペンダント）その他焼成関連の轆、棒状土製品がある。この中で、土師器小皿・杯、瓦器椀の法量に注目してみると、第18図に示すように、小皿が口径9cm、器高1cm、杯が口径16cm、器高3cm、瓦器椀が口径17cm、器高6cmをそれぞれ中心として散布し、纏まりをなしている。土師器の法量による編年は大宰府史跡、博多遺跡などで進

められており、それらによると、本資料の土師器は12世紀後半代にその時期が求められよう。また、瓦器椀については、法量では一定のまとまりを示す。九州の瓦器椀については森田勉氏の論考^{註3)}があるが、氏はI～IV形式に分類し、II形式をa・b、III形式をa・



第18図 SD01出土土器計測値散布図

b・cにそれぞれ細分されている。詳述はしないが、Ⅱ形式とⅢ形式の違いは体部中位の「く」形の屈曲が無くなっていくということであり、また、Ⅲ-a形式は法量が最大となる。氏はⅡ-a形式を12世紀初頭とし、Ⅳ形式を13世紀前半代として、その間のⅢ形式を12世紀後半から13世紀初頭と位置図けられる。今回出土した瓦器椀は体部中位の屈曲が残る個体がいくつか含まれるものの、大半は内外のミガキが雑で、中位の屈曲が消滅して丸く深みのあるⅢ-a形式が占める。また、石鍋については方形の耳が付くタイプや縦耳のミニチュアなど古いタイプの製品も含まれるが、断面方形ないしは台形の鏝が付くタイプが主流であり、鏝の断面が三角で、鏝上位の体部が短くなるタイプは含まれない。更に、片口を含むこね鉢は須恵質、土師質、瓦質と焼成法にはバラエティがあるが、口縁端部の造りや片口の成形法などよく似ており興味深い。これら石鍋類、雑器類はやはり12世紀後半代に位置付けられるもので、本溝から出土した遺物は同時期の一括遺物として捉えられ、そうであれば、この時期の台所容器の様相が金属器や木器を欠くが一揃いとして把握できる好例を得られたと思われる。また、輸入陶磁器が共伴して出土したが、白磁椀Ⅳ類・Ⅴ類、龍泉窯系Ⅰ類、同安窯系青磁など土器類の年代観^{註4)}と齟齬は無い。陶磁器の中には白磁耳壺、褐釉水注など優品があり、獣面を貼り付けた緑釉壺など希少な遺物も出土しており、経済的優位性を示す。

一方、遺構については検出した主な遺構は南北方向の溝と掘立建物、土坑、ピット群がある。溝は北西-南東方向に延びる幅約2mのもので、土層を観察すると少なくとも1回の掘り直しが行われている。調査途中では平面的に捉えられず、遺物は層位的に取り上げたが、整理の段階では前述したように時期差はなく、短期間の掘り直しであったと思われる。溝底は傾斜が緩やかで、水平に近いが、溝底に砂層が堆積しているので、南西方向への水の流れは一定あったと思われる。この溝の性格については、直線部分を検出したのみで、拙速かもしれないが、北接する御笠の森遺跡で検出された区画溝が参考になる。御笠の森遺跡の区画溝は16～17世紀のものと考えられ、小規模な区画溝が連続して営まれている。本遺跡のものとは時期差があるが、同様の形態と考えておきたい。この溝と方向を同じくする掘立建物はその殆どを調査区外へ延ばすため全様は分からないが、柱穴から出土した土器から溝と同時期である。柱穴にグリ石を置いて礎盤とするなど、主屋とはいかないまでも、それに付随する建物と想定できる。そうであれば、規模は分からないが、幅2m程の区画溝に囲まれた一定規模の屋敷が想定できる。この屋敷が単独であるのか、御笠の森遺跡のように連続するのか、周辺調査を待たねばならないが、文献に現れる17世紀後半ごろの村の移転記事^{註5)}より更に古い時代から宝松遺跡と御笠の森遺跡ではその形態は変えながらも、交互に村が移り替わっていたことが想定できる。

註

註1 荒牧宏行編『博多154』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1289集 2016

註2 柴田 剛編『宝松遺跡1』大野城市文化財調査報告書第173集 2019

註3 森田 勉『九州地方の瓦器椀について』考古学雑誌 第59巻 第2号 1973

註4 森田 勉『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』九州歴史資料館研究論集 第4集 1978

註5 青柳種信他『筑前国続風土記拾遺』（福岡古文書を読む会校訂1993 文献出版）1828

図 版

凡例) 遺物写真の番号は挿図番号と同一



遺跡全景（北から）



SB01



SD01

図版2



SB01 (P2)



SB01 (P1)



SD01出土状態 (瓦器碗)



SD01出土状態 (石鍋)



SD01出土状態 (陶器)



SD01土層 (南)



SD01土層 (北)



SD01作業風景



37



46



57



60



81



61



87



67



88



69



91



70



92



74

图版4





图版6



出土遺物4

報告書抄録

ふりがな	ほうまついせき2							
書名	宝松遺跡2							
副書名	第4次調査							
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第178集							
編著者名	澤田 康夫							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2020年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうまついせき 宝松遺跡	ふくおかけんおおのじょうしやまだ ちょうめ 福岡県大野城市山田4丁目 467-4他			33° 32' 39"	130° 28' 22"	20190117 ～ 20190326	320m ²	店舗建築
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
ほうまついせき 宝松遺跡	集落	中世	掘立建物・溝・ 土坑	土師器・輸入陶磁器・ 瓦器・滑石製品				
要約	<p>宝松遺跡は市域の北部に位置し、御笠川左岸の沖積平野の微高地上に営まれる遺跡である。本遺跡では過去に3回の調査が行われており、今回は第4次の調査である。店舗建築に伴い、影響範囲320m²について調査した。調査区内は近・現代の攪乱が広い範囲で及び、遺構を断片化させているが、中世の屋敷跡とみられる遺構を検出した。調査の結果、調査区の東辺で幅2.3m、深さ約1mの南北に直線的に延びる溝を検出し、西半では、同時期と思われる掘立柱建物を検出した。溝からは土器類が多量に出土した。土師器杯・小皿、瓦器椀、輸入陶磁器、雑器、滑石製品などが、見られるが、土師器の法量などから一括性の高い出土遺物とみることができる。掘立柱建物は柱穴にグリ石を入れて礎盤とするもので、溝と同時期の土器が出土していることから、屋敷の主屋は調査区外になるが、付属建物と、屋敷を囲む溝とを検出したと考えられる。</p>							

宝松遺跡 2

－第4次調査－

大野城市文化財調査報告書 第178集

令和2年3月31日

発行 大野城市教育委員会
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社
〒848-0035 伊万里市二里町大里乙3617-5